戦後日本の地域的不均等発展と地域社会類型の新段階：第1章 市町村における地域基礎構造の変動と地域社会類型

小内 透

『調査と社会理論』・研究報告書 第20号

2005-03

http://hdl.handle.net/2115/22652

bulletin (article)

20_P17-62.pdf
第3章 市町村における地域基礎構造の変動と地域社会類型

さて、以上、マクロな地域社会変動の実相を明らかにするため、都道府県を単位とした地域社会類型の設定を試みてきた。しかし、マクロな地域社会変動の実相をより詳細に明らかにするためには、市町村を単位にした分析も必要となる。そこで、この点にこたえるため、すでに第1章で述べた如く、都道府県の場合に用いた4次元に階層性（人口規模）の次元を、市町村を単位とした地域社会類型の設定を行う。なお、その際、2000年ベースの3,230市町村（東京都特別区は23区あわせて1地域。ただし、2000年は市町村が国勢調査の対象外とされたため3,229市町村）を対象にし、それ以前に合併したものは可能な限りその範囲にあわせ修正した。かつての市町村が複数の市町村へ分割編入した場合、それぞれの指標ごとに推計を行い、可能な限り2000年ベースの市町村の範囲に再編した(9)。

第1節 生産力水準の市町村間格差

まず、前章と同様、地域社会類型化の第一の次元である生産力水準について、市町村間の地域格差をみてみよう。

表3-1は、都道府県の類型化に用いた地域内純生産の指標が資料の制約上入手できないため、それにかわって常住人口一人あたり個人所得（課税対象所得）を指標に生産力（所得）水準段階市町村数の推移をまとまったものである（1970年以降の数値しか公表されていない）。ここから、一方で1970年から1985年かけて全国値の50%未満の市町村が着実に減少し、他方で1970年から1980年に超高生産力地域に属する全国値の125～150%未満の市町村と150%以上の市町村の数を減らしたことがわかる。それは、少なくとも1970年から1980年まで全体として地域格差の縮小が進んだことを示している。その後に、都道府県の場合も同様、高度経済成長期から低成長期への移行という経済情勢の変化があったことは間違いない。

しかし、都道府県の場合は異なり、一方で超高生産力地域は1980年がボトムでそれ以降増加傾向に転じ、他方で1985年に9.9%と1割を切った全国値50%未満の市町村も1990年には一転して16.5%と急増している。1980年代後半のバブル経済による相対的な景気上昇にともなってそれまで着実に縮小傾向を示していた市町村間の生産力（所得）格差が1980年以降、逆に拡大傾向を見るようになっているのである。

表3-1 人口一人当たり個人所得の各階級に対する労働力の市町村数の推移（生産力指標）

<table>
<thead>
<tr>
<th>市町村数の推移（生産力指標）</th>
<th>生産力水準</th>
<th>生産力水準</th>
<th>生産力水準</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>50%未満</td>
<td>1.035</td>
<td>1.245</td>
<td>1.490</td>
</tr>
<tr>
<td>50%~75%未満</td>
<td>696</td>
<td>1.245</td>
<td>1.490</td>
</tr>
<tr>
<td>75%~100%未満</td>
<td>696</td>
<td>1.245</td>
<td>1.490</td>
</tr>
<tr>
<td>100%未満</td>
<td>696</td>
<td>1.245</td>
<td>1.490</td>
</tr>
<tr>
<td>100%以上</td>
<td>696</td>
<td>1.245</td>
<td>1.490</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注: 1) 1970年には財政の市町村の数値が不明のため、除外した。
2) 1980年以前の市町村数の数値は資料がないため空欄。
3) 各人所得×基礎=生産力水準であり統計値を含めない。
4) 各年の全国一人当たり個人所得は以下の通りである。
<table>
<thead>
<tr>
<th>表3-2 都道府県別高生産力・高生産力市町村数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>高生産力</td>
</tr>
<tr>
<td>高生産力</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注: 資料も表3-1を参照。

ところで、1995年になると、ふたたび全国値50%未満の市町村が5.2%とそれまでにない水準まで急減し、超高生産力地域も減少した。その傾向は2000年にさらに強まり、全国値50%未満の市町村が3.0%、超高生産力地域の市町村が1.2%まで減少した。その水準はいずれも過去最低であり、バブル崩壊後の長い不況に伴って、市町村間の生産力（所得）格差が確実に縮小傾向に転じたことがわかる。その意味で、市町村の場合、生産力（所得）水準のある方は景気の動向に都道府県よりもはるかに敏感に左右されると考えられる。

だが、同時に注目しておく必要があるのは、こうした全体的な生産力（所得）格差の縮小→拡大→縮小傾向の中で、全国値以上の高生産力地域、超高生産力地域を一貫して10%程度とほんのわずかしか存在していないことである。逆にいえば、全国の市町村の約90%がつねに全国値未満の低生産力地域にとどまっているということである。いわば、わずか10%の市町村がわが国一人あたり個人所得の水準を大きく引き上げ、残りの90%の市町村のうえに全国値水準以上の地域として君臨しているといってよい。これに、きわめて偏った市町村間の生産力（所得）格差が存在していることが明らかとなる。したがって、全体的な生産力（所得）格差の縮小→拡大→縮小という動きの背後に、市町村間の圧倒的な生産力（所得）格差という根強い構造が存在していることを見過ごしてはならない。

→30県→32県→33県→35県→32県→30県）。ここから、市町村間の生産力（所得）格差は、東京、神奈川、大阪、愛知、埼玉に（超）高生産力市町村が集中、それ以外の多くの県が自県内の90%を占める低生産力市町村を抱え、東北・九州にはほとんど高生産力市町村が存在しない形をとっていることがわかる。しかも、全体的な生産力（所得）格差の縮小→拡大→縮小傾向にもかかわらず、そうした構造は1970～2000年の30年間、基本的に崩れていない。このようにみてみると、統体としての高度に発達した日本資本主義の実相も、一たび市町村レベルにまでおりと、そこにはきわめて歪んだ生産力（所得）の地域的不均等の構造が厳然と存在していることが、うかがわってくる。

第2節 生産関係の地域的差異
次に、地域社会類型化に関する次の次元・指標である生産関係の地域的差異を見ると、そこには、都道府県単位と同様な特徴が現われている。すなわち、表3-3の如く、全体として各市町村において中間層（自営業層）の分解傾向が1955年以降急速に進展している。1955年時点で83.0%あった後進資本主義的地域が現在では0.7%にまで減少し、逆に逆って17.0%にすぎなかった資本一賃労働関係が優位な地域（先進資本主義的地域+中進資本主義的地域）が全く99.3%に達している。1955年から2000年45年間にすさまじい勢いで、中間層の分解による後進資本主義的地域の解体が進んだことが浮き彫りになる。


しかし、こうした動向を先進資本主義的地域（市町村）の割合別都道府県数の推移から見てみると（表3-4、表3-5）、先進資本主義的地域（市町村）の配置には現在でも一定の偏りが見られる。たとえば、表3-5のように1955年時点では先進資本主義的地域が自県内の25%未満の府県が441か所が、低成長期に入り1975年以降急速に減少し現在ではこのタイプに属する県は皆無になった。しかも、かつて30県も存在していた自県内に先進資本主義的地域がまったく存在しない県も1975年の1県を最後に消滅するように

| 表3-3 資本一賃労働関係の成熟度別市町村数の推移（生産関係指数） |
|-----------------|-----------------|-----------------|
|                  | 1955年          | 1960年          | 1965年          |
|                  | 1970年          | 1975年          | 1980年          |
|                  | 25%未           | 25%～75%        | 75%～100%       | 25%未           | 25%～75%        | 75%～100%       | 25%未           | 25%～75%        | 75%～100%       | 25%未           | 25%～75%        | 75%～100%       |

-19-
### 表3-4 都道府県別先進資本主義的市町村数

| 年度 | 北海道 | 青森 | 宮城 | 秋田 | 山形 | 福島 | 茨城 | 栃木 | 茨城 | 愛知 | 三重 | 滋賀 | 京都 | 大阪 | 兵庫 | 島根 | 岡山 | 広島 | 山口 | 徳島 | 香川 | 愛媛 | 高知 | 福岡 | 佐賀 | 長崎 | 熊本 | 大分 | 宮崎 | 鹿児島 | 沖縄 |
|------|--------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 1995年 | 12 | 19 | 21 | 37 | 55 | 69 | 79 | 83 | 104 | 126 | 5.7 | 9.0 | 9.9 | 17.5 | 25.9 | 32.5 | 31.5 | 37.3 | 39.2 | 49.1 | 59.4 | 3 | 4 | 6 | 7 | 8 | 13 | 27 |
| 1996年 | 1 | 2 | 3 | 6 | 7 | 11 | 16 | 19 | 24 | 25 | 1.7 | 3.4 | 3.4 | 8.5 | 11.9 | 20.3 | 25.4 | 34.2 | 42.4 |
| 1997年 | 1 | 2 | 3 | 6 | 11 | 14 | 20 | 55 | 58 | 2 | 1.4 | 2.8 | 4.2 | 8.5 | 15.5 | 18.7 | 28.2 | 46.3 | 81.7 |
| 1998年 | 1 | 1 | 2 | 3 | 8 | 14 | 32 | 44 | 1 | 1.4 | 1.4 | 2.9 | 5.3 | 11.6 | 20.3 | 30.3 | 45.2 | 63.8 |
| 1999年 | 1 | 2 | 3 | 6 | 11 | 16 | 34 | 50 | 1 | 1.1 | 3.3 | 7.8 | 17.8 | 42.2 | 55.6 |
| 2000年 | 1 | 2 | 3 | 6 | 11 | 14 | 31 | 55 | 1 | 1.2 | 3.2 | 3.5 | 11.8 | 24.7 | 40.0 | 64.7 | 74.1 |
| 2001年 | 2 | 2 | 2 | 5 | 5 | 14 | 25 | 34 | 43 | 4.1 | 4.1 | 4.1 | 10.6 | 10.2 | 10.2 | 28.6 | 51.0 | 69.4 | 87.8 |
| 2002年 | 1 | 2 | 3 | 6 | 12 | 14 | 34 | 57 | 1.4 | 2.9 | 2.9 | 8.6 | 11.4 | 17.1 | 34.3 | 61.4 | 81.4 |
| 2003年 | 3 | 11 | 14 | 22 | 39 | 51 | 62 | 89 | 62 | 3.3 | 12.0 | 15.2 | 23.9 | 42.4 | 55.4 | 67.4 | 84.6 | 96.7 | 100.0 |
| 2004年 | 2 | 5 | 9 | 16 | 26 | 39 | 51 | 61 | 2.5 | 6.3 | 11.3 | 20.0 | 23.8 | 32.5 | 47.2 | 63.8 | 78.3 | 100.0 | 100.0 |
| 2005年 | 2 | 6 | 9 | 14 | 20 | 29 | 61 | 61 | 2.6 | 5.6 | 10.3 | 18.1 | 22.2 | 31.1 | 56.8 | 87.6 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |
| 2006年 | 3 | 11 | 14 | 22 | 36 | 54 | 73 | 90 | 2.9 | 7.0 | 14.0 | 25.6 | 37.2 | 50.5 | 75.0 | 90.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |
| 2007年 | 3 | 11 | 14 | 22 | 37 | 73 | 90 | 104 | 3.3 | 7.0 | 14.0 | 32.0 | 43.0 | 50.5 | 75.0 | 90.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |
| 2008年 | 3 | 11 | 14 | 22 | 36 | 73 | 90 | 104 | 3.3 | 7.0 | 14.0 | 32.0 | 43.0 | 50.5 | 75.0 | 90.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |
| 2009年 | 3 | 11 | 14 | 22 | 36 | 73 | 90 | 104 | 3.3 | 7.0 | 14.0 | 32.0 | 43.0 | 50.5 | 75.0 | 90.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |
| 2010年 | 3 | 11 | 14 | 22 | 36 | 73 | 90 | 104 | 3.3 | 7.0 | 14.0 | 32.0 | 43.0 | 50.5 | 75.0 | 90.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |

### 表3-5 先進資本主義的領域（市町村）の割合別

<table>
<thead>
<tr>
<th>都道府県</th>
<th>25%未満</th>
<th>25%〜50%</th>
<th>50%〜75%</th>
<th>75%〜</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>青森</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>宮城</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>秋田</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>山形</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>福島</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>茨城</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>栃木</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>愛知</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>三重</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>滋賀</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>京都</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>大阪</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>兵庫</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>島根</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>岡山</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>広島</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>山口</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>徳島</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>香川</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>愛媛</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>高知</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>福岡</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>佐賀</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>長崎</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>熊本</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>大分</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>宮崎</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>鹿児島</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>沖縄</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注：1.25%未満の（）内は先進資本主義的地域が該当の内数
2.25%〜50%の（）内は先進資本主義的地域が合計の内数
資料：表3-4より作成

---

# 20
なっている。そして、1985年からは自県内の全市町村が先進資本主義的地域になった県も出現している。

しかし、2000年現在でも、埼玉、神奈川、富山、滋賀、大阪のように全市町村が先進資本主義的地域になった府県が存在する一方、まだまだ先進資本主義的地域が過半数に達していない県が九州や東北などに7つある（青森、岩手、和歌山、高知、熊本、大分、宮崎）。

こうして、市町村を単位とした場合、たしかに、現在、資本＝労働関係が優位な地域が主流を占め、先進資本主義的地域と中進資本主義的地域が肩を並べるまでになっただけもあるが、それでも先進資本主義的地域が過半数に達していない県も特定の場所に集中する形で残存していることが明らかとなる。

第3節 市町村レベルでの産業構造の特質

このように、市町村の生産力（所得）や生産関係の地域間格差は都道府県を単位とした場合と比べ、異なる特徴をもっていた。同様に、地域社会類型の第三の次元である産業構造の変化を市町村レベルにおいてみると、いくつかの点で都道府県と同様な傾向が見られる反面、都道府県とは異なる事態も見出していることがわかる。その点を明らかにしたのが表3-6である[28]。

表3-6を見ると、まず第一に、それぞれの数は少ないものの、都道府県ではまったくみられなかった類型が存在している。林業主導型、漁業主導型、銅業主導型、運輸・通信業主導型という価値産業部門中の単一産業主導型や公務主導型、金融・保険業主導型などの不生産部門主導型が1955〜2000年のいずれかの年に存在している[28]。

第二に、2000年現在、都道府県でもっとも主要な類型であったサービス業主導型（28府県・59.6%）が、市町村の場合にも1990〜2000年にかけて大きく増加し、もっとも主要な類型になっている。ただし、その割合は40.7%と都道府県と比べると低い。しかし、都道府県の産業構造類型を人口ベースのみで見ると、サービス業主導型は38県（80.9%）とさらに多いので、それと比較すると市町村単位におけるサービス業主導型の割合はさらに少なくななる。

第三に、2000年現在、サービス業主導型以外の都道府県を特徴づける製造業主導型が市町村でも23.1%で第二位の位置を占めている。しかも、高度経済成長期から低成長期にかけ増加したので、1990年をピークにしてそれ以降減少傾向を示しているという点でも都道府県と似ている。しかし、現時点の割合は、都道府県（19県・40.4%）と比べると、かなり少ない。ただし、就業人口ベースで都道府県の産業構造を見るとき、9県19.1%なので、この点では市町村間ではほぼ同じ水準になる。その意味では、製造業主導型の場面、サービス業と異なり、就業人口ベースでは都道府県と同様な傾向を示すものの、生産額ベースを考慮すると、サービス業主導型と同様、都道府県と比べ、その割合が低いという特徴が見いただせる。

第四に、それにかわって、市町村の場合、都道府県と異なり複合型の多さが目立つ。1955年の時点で都道府県ではこの類型がまったく存在しなかった（ただし、就業人口ベースでは6県・10.9%）のに対し、市町村ではすでに15.2%と、割合は少ないものの、農業主導型で第二位の位置を占めていた。それがあっ見降着実に増加し、1980年にはそれまで一貫して第一位の座を占めていた農業主導型を抜きトップの位置（35.2%）を占めるまでになった。その後、1985年の35.6%を境に減少に転じるが、1995年まではトップの位置を維持し、2000年に二位に順位を下げたものの、21.2%と比較的大きな割合を保っている。しかも、複合型の内訳を見ると、農業主軸のものが多なくなっている。少なくとも1990年までは農業主軸が複合型のトップの座を維持していた。1995年から製造業主軸にその座を譲ることになったが、2000年現在でも、製造業主軸が9.8%、農業主軸が9.0%とほぼ同じ程度の割合を示している。その意味で、農業主軸を多く含んだ複合型の多さという点で市町村の産業構造は都道府県と比べ、異なる特徴を示している。

第五に、農業主導型が激減したものの都道府県の場合と異なり、一定の厚みをもって存在し続けることも一つの特徴といえる。農業主導型をもつ市町村は、1955年時点で72.1%と圧倒的な数にのぼっていた。すでにみたように、この時点で、都道府県も同様な傾向を示していた。その後の推移を見ても、都道府県と同様、高度経済成長期において着実な減少を見せ、低成長期に入ると減少のスピードはそれまで
<table>
<thead>
<tr>
<th>年</th>
<th>単一産業主導型</th>
<th>二重</th>
<th>複合型</th>
<th>不生產部門主導型</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>Ⅰ農業</td>
<td>Ⅱ林業</td>
<td>Ⅲ漁業</td>
<td>Ⅳ銅業</td>
</tr>
<tr>
<td>1955年</td>
<td>2,477</td>
<td>4</td>
<td>32</td>
<td>30</td>
</tr>
<tr>
<td>1960年</td>
<td>2,289</td>
<td>6</td>
<td>30</td>
<td>27</td>
</tr>
<tr>
<td>1965年</td>
<td>2,072</td>
<td>7</td>
<td>41</td>
<td>17</td>
</tr>
<tr>
<td>1970年</td>
<td>1,829</td>
<td>6</td>
<td>43</td>
<td>8</td>
</tr>
<tr>
<td>1975年</td>
<td>1,356</td>
<td>8</td>
<td>42</td>
<td>7</td>
</tr>
<tr>
<td>1980年</td>
<td>972</td>
<td>6</td>
<td>39</td>
<td>7</td>
</tr>
<tr>
<td>1985年</td>
<td>761</td>
<td>40</td>
<td>5</td>
<td>18</td>
</tr>
<tr>
<td>1990年</td>
<td>490</td>
<td>34</td>
<td>2</td>
<td>19</td>
</tr>
<tr>
<td>1995年</td>
<td>386</td>
<td>31</td>
<td>1</td>
<td>26</td>
</tr>
<tr>
<td>2000年</td>
<td>210</td>
<td>29</td>
<td>1</td>
<td>35</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注) 1955年～1965年までは沖縄県を含んでいない。
資料: 業務庁（総理府）『国勢調査報告』より作成。
<table>
<thead>
<tr>
<th>年度</th>
<th>小数値</th>
<th>複合型</th>
<th>テイシ</th>
<th>合計</th>
<th>小数値</th>
<th>複合型</th>
<th>テイシ</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1960</td>
<td>4</td>
<td>24</td>
<td>0</td>
<td>29</td>
<td>4</td>
<td>24</td>
<td>0</td>
<td>29</td>
</tr>
<tr>
<td>1961</td>
<td>5</td>
<td>25</td>
<td>0</td>
<td>30</td>
<td>5</td>
<td>25</td>
<td>0</td>
<td>30</td>
</tr>
<tr>
<td>1962</td>
<td>6</td>
<td>26</td>
<td>0</td>
<td>32</td>
<td>6</td>
<td>26</td>
<td>0</td>
<td>32</td>
</tr>
<tr>
<td>1963</td>
<td>7</td>
<td>27</td>
<td>0</td>
<td>34</td>
<td>7</td>
<td>27</td>
<td>0</td>
<td>34</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注1. 市町村の産業構成は、内閣府市町村の産業構成のデータによる。もっとも市町村のデータを示す。
注2. 産業構成は複合型である場合、両方ともカウントしている。そのため、合計は複合型と単体を含んでいる。
注3. 内4の数値は市町村の50%以上が当該職業になっている市町村の数次。

資料: 表3-6と同じ。

表3-8 都道府県別主要産業構造別の市町村数（2000年）

<table>
<thead>
<tr>
<th>都道府県</th>
<th>産業</th>
<th>複合型</th>
<th>テイシ</th>
<th>合計</th>
<th>産業</th>
<th>複合型</th>
<th>テイシ</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>1</td>
<td>15</td>
<td>1</td>
<td>22</td>
<td>1</td>
<td>15</td>
<td>1</td>
<td>22</td>
</tr>
<tr>
<td>青森</td>
<td>1</td>
<td>12</td>
<td>1</td>
<td>17</td>
<td>1</td>
<td>12</td>
<td>1</td>
<td>17</td>
</tr>
<tr>
<td>宮城</td>
<td>1</td>
<td>10</td>
<td>1</td>
<td>12</td>
<td>1</td>
<td>10</td>
<td>1</td>
<td>12</td>
</tr>
<tr>
<td>福島</td>
<td>1</td>
<td>9</td>
<td>1</td>
<td>11</td>
<td>1</td>
<td>9</td>
<td>1</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>新潟</td>
<td>1</td>
<td>8</td>
<td>1</td>
<td>10</td>
<td>1</td>
<td>8</td>
<td>1</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>東京</td>
<td>1</td>
<td>7</td>
<td>1</td>
<td>9</td>
<td>1</td>
<td>7</td>
<td>1</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>神奈川</td>
<td>1</td>
<td>6</td>
<td>1</td>
<td>7</td>
<td>1</td>
<td>6</td>
<td>1</td>
<td>7</td>
</tr>
<tr>
<td>愛知</td>
<td>1</td>
<td>5</td>
<td>1</td>
<td>7</td>
<td>1</td>
<td>5</td>
<td>1</td>
<td>7</td>
</tr>
<tr>
<td>三重</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>1</td>
<td>6</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>1</td>
<td>6</td>
</tr>
<tr>
<td>京都</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>兵庫</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>大阪</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
</tr>
</tbody>
</table>

資料: 表3-6と同じ。
①1955年から2000年までそれぞれの都道府県内の市町村は農業主導型、製造業主導型、複合型、サービス業主導型のいずれかの産業構造類型をもっともも主なものとしていた。それは、全体的に見た市町村単位の産業構造類型の特徴と相まってしている。

②このうち、1955年の時点では大阪を除くすべての県で農業主導型の市町村がもっとも主な類型となっており、そのうち、県内の50%以上の市町村が農業主導型を含む県（東京都、神奈川県）を除く43県にまで及んでいた。しかし、それ以降、いずれの県においても農業主導型を含む市町村が確実に減少し、2000年には農業主導型を含む市町村がもっとも主な類型になった。

③逆に、製造業主導型を含む、1955年の時点でこの類型を含む市町村がもっとも主な類型は、1955年時点で大阪を除き、1960年に大阪が初めてこれに該当するようになり、1990年には16県で製造業主導型の市町村がもっとも主なものになった。したがって、この年をピークに、こうした都道府県は減少し、2000年現在、茨城、栃木、群馬、埼玉、富山、岐阜、静岡、愛知、三重、滋賀など10県まで低下している。そのうち、北関東の茨城、栃木、群馬、北陸の富山を除く6県が太平洋ベルト地域に属している。また、太平洋ベルト地域に属する埼玉、静岡、愛知、滋賀と富山の5県が、自県内での50%以上が製造業主導型の市町村になっている。

これとは対照的に、青森、岩手、沖縄の3県では現時点で製造業主導型の市町村がもっとも主なものになっている。これに、製造業主導型の市町村が10%未満の道県を加えると、北海道、東北、九州を中心として14県（北海道、青森、岩手、千葉、和歌山、鳥取、島根、高知、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、沖縄）にのぼる。これから、製造業主導型を含む市町村は、きわめて偏った分布を示していることが明らかになる。

④これに対し、複合型の場合、この産業構造類型を含む市町村がもっとも主な類型は1955年時点で1つの（大阪）しか存在しなかった。しかし、その後、製造業主導型の複合型を含む14県で増加している。その結果、1990年にを含む都道府県の主たる半数を占めた25県に達した。しかし、製造業主導型の場合と同様、それ以降減少に転じ、現在（2000年）では東北6県（青森、岩手、秋田、山形、福島）と岡山、宮崎の8県となり製造業主導型の場合を含む、15県にまでになっている。そのうち、自県内の50%以上の市町村が複合型を含む県は現時点で山形の1県のみとなり、製造業主導型の場合よりも少なくになっている。これから、複合型の産業構造を含む市町村は主として東北各県に集中・限定される傾向を強めていることが明らかになる。

⑤近年急増し、トップの位置を占めるようになったサービス業主導型について見ると、この県を含む市町村がもっとも主な都道府県が現われるのは、1980年以降が初めて2000年の時点でもわずかに東京、和歌山、沖縄の3県しかない。これは、農業主導型の場合よりも少ない数である。しかし、それ以降急激にこの県の勢いを拡大し、2000年には全国道府県の6割を超える29都府県でサービス業主導型の市町村が最多となり、そのうち15県が50%以上が市町村がサービス業主導型になっている。しかも、その15県は東北、中部を除く全国各地に分布している。そのうえ、サービス業主導型の市町村が50%未満の都道府県は存在しなくなっている。それだけ、サービス業主導型を含む市町村が幅広く分布していることがわかる。

ただし、サービス業そのものが他の産業部類とは異なりきわめて多様な性格の産業分野を含んでいるので、サービス業主導型の市町村が集中する県の性格は必ずしも一致しないという点も押さえておく必要がある[(35)]。

以上のように、2000年現在、サービス業主導型の市町村が6割を超える都道府県で主流を占め、製造業主導型は太平洋ベルト地域や北関東などの諸県、複合型は主として東北各県に集中・限定する傾向が明らかになる。いええね、市町村レベルで見た産業構造は、都道府県以上に地域間の不均等を明確なものにしていることができる。

第4節 市町村の開放性＝通動人口比率の高まり
さて、このように、市町村単位で産業構造を見ると、そこには都道府県を単位とする分析だけでは把握できない独自な姿がうかびあがる。しかし、こうした事実は、すべての市町村において、独自の産業構造
表3-9 通勤人口比率比段別市町村数の推移（開放性指標）

<table>
<thead>
<tr>
<th>年代</th>
<th>一時的地域</th>
<th>10年間</th>
<th>地域</th>
<th>政策地域</th>
<th>区域 ( A ) 以上の地域</th>
<th>区域 ( B ) 以上の地域</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1955年</td>
<td>25%未満</td>
<td>25%〜50%</td>
<td>50%〜75%</td>
<td>75%〜100%</td>
<td>25%未満</td>
<td>25%〜50%</td>
</tr>
<tr>
<td>1956年</td>
<td>1.852</td>
<td>268</td>
<td>567(23)</td>
<td>272(2)</td>
<td>(2)</td>
<td>(2)</td>
</tr>
<tr>
<td>1957年</td>
<td>2.620</td>
<td>420</td>
<td>72(17)</td>
<td>18(18)</td>
<td>(9)</td>
<td>35</td>
</tr>
<tr>
<td>1958年</td>
<td>2.570</td>
<td>430</td>
<td>72(17)</td>
<td>18(18)</td>
<td>(9)</td>
<td>35</td>
</tr>
<tr>
<td>1959年</td>
<td>2.720</td>
<td>737</td>
<td>122(38)</td>
<td>36(22)</td>
<td>(11)</td>
<td>60</td>
</tr>
<tr>
<td>1960年</td>
<td>1.804</td>
<td>1,071</td>
<td>235(54)</td>
<td>34(33)</td>
<td>(18)</td>
<td>87</td>
</tr>
<tr>
<td>1961年</td>
<td>1.538</td>
<td>1,285</td>
<td>288(79)</td>
<td>75(60)</td>
<td>(24)</td>
<td>145</td>
</tr>
<tr>
<td>1962年</td>
<td>877</td>
<td>1,387</td>
<td>587(94)</td>
<td>130(107)</td>
<td>(48)</td>
<td>208</td>
</tr>
<tr>
<td>1963年</td>
<td>654</td>
<td>1,274</td>
<td>763(122)</td>
<td>192(139)</td>
<td>(66)</td>
<td>166</td>
</tr>
<tr>
<td>1964年</td>
<td>473</td>
<td>1,056</td>
<td>403(116)</td>
<td>301(260)</td>
<td>(46)</td>
<td>326</td>
</tr>
<tr>
<td>1965年</td>
<td>3,49</td>
<td>918</td>
<td>968(96)</td>
<td>430(255)</td>
<td>(264)</td>
<td>357</td>
</tr>
<tr>
<td>1966年</td>
<td>2,30</td>
<td>764</td>
<td>929(89)</td>
<td>574(298)</td>
<td>(360)</td>
<td>509</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(注) 1. 通勤人口比率（市町村からの通勤者＋市町村への通勤者）÷市町村内在住者にて算出
2. ベッドタウン型＝地域に在住する10歳以上就業人口の50%以上が市町村外へ通勤
3. 放射状型＝地域に在住する10歳以上就業人口の50%以上が市町村外へ通勤（流入）
4. 組合型＝地域に在住する10歳以上就業人口の50%以上が地域内に在住
5. 2000年以降に合併した市町村の場合は、2000年時点時の市町村数を用いた計算でこのような
6. 25歳~50歳間で通勤状態を示した柱の比率を示した。}

これか、都道府県と同様な基準で通勤人口の動きを見ると、都道府県では数少なかった25%以上の通勤人口比率を示す地域が急増し、1955年の11%から2000年には91.9%まで増大していることがわかる。通勤人口比率50%以上の市町村に限定してみても、現在では1,205（68.3%）と7割弱に達するまでになっている。しかも、その中には、ベッドタウン型、求心型、超流動型といういう地域特性をもったが通勤人口比率の高い地域が存在する。

こうした事態を都道府県別に見ると（表3-10、表3-11）、1955年で通勤人口比率50%以上の市町村が自県内の半数以上を占める都道府県は大阪しか存在しなかった。しかし、このタイプの市町村がまったく存在しない県も27あった。それが、高度経済成長の過程で大阪に続いて、東京（1960年以降）、神奈川（1965年以降）、帯広、愛知（以上、1975年以降）で半数以上の市町村が開放地域や特殊地域をとるようになった。とくに、大阪は1975年に特殊形態をとる市町村だけで自府内の過半数に達するまでになった。これかから、高度経済成長期において三大都市圏で通勤圏が拡大したことが浮き彫りになる。

しかし、1975年以降の低成長期になると、三大都市圏以外にも半数以上の市町村が通勤人口比率50%以上に達する県が拡大し、2000年には計7府県まで達している。このうち、神奈川と大阪ではすべての市町村が通勤人口比率50%以上に達している。

この中にあって、開放的市町村や特殊形態の市町村がまったく存在しない県は1980年の青森と宮城を最後に姿を消している。しかし、2000年以降で通勤人口比率が50%以上の市町村が20%未満のところは北海道

—25—
### 表3-10

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>信良</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>岩手</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>宮城</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>秋田</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>山形</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>福島</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>岡山</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>群馬</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>岐阜</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>高知</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>兵庫</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>長崎</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>佐賀</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>宮崎</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>茨城</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>兵庫</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>千葉</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>栃木</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>東京</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>神奈川</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>高知</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>群馬</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>大阪</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>兵庫</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>岐阜</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>佐賀</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>宮崎</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>茨城</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>兵庫</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>千葉</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>栃木</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>東京</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>神奈川</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>高知</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>群馬</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>大阪</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>兵庫</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>岐阜</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>佐賀</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>宮崎</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>茨城</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>兵庫</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>千葉</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>栃木</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>東京</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>神奈川</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>高知</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>群馬</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>大阪</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>兵庫</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>岐阜</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>佐賀</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>宮崎</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>茨城</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）○ 内は通勤型人口50%以上市町村のうち特殊市町村を含むものである。
表3-11 開放市町村・特殊形態市町村が50％以上の都道府県数

<table>
<thead>
<tr>
<th>年度</th>
<th>開放的</th>
<th>特殊形態</th>
<th>開放的</th>
<th>特殊形態</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1955</td>
<td>1</td>
<td>2.2</td>
<td>2</td>
<td>2.2</td>
</tr>
<tr>
<td>1960</td>
<td>3</td>
<td>6.3</td>
<td>3</td>
<td>6.3</td>
</tr>
<tr>
<td>1965</td>
<td>5</td>
<td>10.6</td>
<td>5</td>
<td>10.6</td>
</tr>
<tr>
<td>1970</td>
<td>8</td>
<td>21.3</td>
<td>8</td>
<td>21.3</td>
</tr>
<tr>
<td>1975</td>
<td>17</td>
<td>36.2</td>
<td>17</td>
<td>36.2</td>
</tr>
<tr>
<td>1980</td>
<td>28</td>
<td>50.6</td>
<td>28</td>
<td>50.6</td>
</tr>
<tr>
<td>1985</td>
<td>34</td>
<td>72.3</td>
<td>34</td>
<td>72.3</td>
</tr>
<tr>
<td>2000</td>
<td>27</td>
<td>78.7</td>
<td>27</td>
<td>78.7</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注）注、資料とも表3-9を参照。

表3-12 人口規模別市町村数・構成比の推移（階級統計）

<table>
<thead>
<tr>
<th>年度</th>
<th>1級大規模地域</th>
<th>2級大規模地域</th>
<th>3級中規模地域</th>
<th>4級小規模地域</th>
<th>5級小規模地域</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1955</td>
<td>5</td>
<td>18</td>
<td>251</td>
<td>1,790</td>
<td>936</td>
</tr>
<tr>
<td>1960</td>
<td>6</td>
<td>20</td>
<td>258</td>
<td>1,659</td>
<td>989</td>
</tr>
<tr>
<td>1965</td>
<td>7</td>
<td>23</td>
<td>277</td>
<td>1,490</td>
<td>1,076</td>
</tr>
<tr>
<td>1970</td>
<td>8</td>
<td>28</td>
<td>306</td>
<td>1,368</td>
<td>1,072</td>
</tr>
<tr>
<td>1975</td>
<td>10</td>
<td>39</td>
<td>335</td>
<td>1,222</td>
<td>1,009</td>
</tr>
<tr>
<td>1980</td>
<td>10</td>
<td>45</td>
<td>352</td>
<td>1,319</td>
<td>969</td>
</tr>
<tr>
<td>1985</td>
<td>11</td>
<td>49</td>
<td>366</td>
<td>1,300</td>
<td>937</td>
</tr>
<tr>
<td>1990</td>
<td>11</td>
<td>54</td>
<td>374</td>
<td>1,268</td>
<td>896</td>
</tr>
<tr>
<td>1995</td>
<td>11</td>
<td>54</td>
<td>382</td>
<td>1,248</td>
<td>860</td>
</tr>
<tr>
<td>2000</td>
<td>12</td>
<td>54</td>
<td>387</td>
<td>1,220</td>
<td>834</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注）1. 2000年の市町村を基準単位とし、それ以前に合併したものは合算。2. 2000年以降に1つ以上の市町村から分立してできたものも含む。分立前の数値は合算し、分立した市町村の数を含めなかったものである。資料：総務省「国勢調査報告」より作成。

道しかなく、他の諸県はいずれも30％以上の水準に達している。しかし、北海道、青森、岩手、鳥取、愛媛、高知、長崎、大分、宮崎、鹿児島の10道県では、通勤人口比率が50％以上の市町村が半数以上に達していない。それは、通勤人口比率の高い市町村が相対的に少ない道県が、日本列島の縁辺部に位置する北海道と東北や中国四・九州の一部に限定・集中しており、これらの地域に通勤人口から見て閉鎖的な市町村が比較的多く存在していることを示している。

こうして、通勤人口＝開放性のあり方は1955年以降、一貫して開放性の高い市町村が増加する方向で推移してきた。とくに低成長期以降の動きにはめざましいものがあった。その結果、一部の県でまだに閉鎖的な地域が多数派を占めるものの、ほとんどの都道府県では開放的な市町村、特殊形態をとる市町村が一般的になった。こうした事態は、市町村としての地域社会の相対的自立性が全体として次第に弱化しつつあることを意味している。その意味で、市町村はより広域の地域社会の中で自らの存立基盤を確実にすることが求められているといえる。

第5節 市町村の人口規模の不均等発展——階級統計とかわって——

ところで、これまで見てきた市町村の基礎的な構造変化は、その結果として人口規模の極端な不均等を助長させてきた。そこで、この点を地域社会類型化の第五の次元・階級統計の指標である人口規模のあり方からみてみよう。

表3-12は人口10万人以上の地域を超大規模地域、30万人～100万人未満を大規模地域、5万人～30万人未満を中規模地域、1万人～5万人未満を小規模地域、そして1万人未満を零細地域として、2000年現在の
市町村の範囲を基礎として人口規模別市町村数の推移をみたものである。これをみてまず気づくことは、1955～2000年の45年間、5万人未満の地域が一貫して全市町村のほぼ90％を占めていることである。

しかし、そうした構造をより詳しく見ると、少しずつではあるが着実に変化していることがわかる。つまり、人口1万人～5万人未満の小規模地域が一貫して減少する一方、中規模以上のいずれの地域も微増している。これに対し、1万人未満の零細地域は5千人規模を境にやや異なった傾向を示す。一方で、1955～1965年まで増加した5千人～1万人未満規模の地域が1965年を境に減少し、他方で、5千人未満の地域は2000年まで一貫して増加している。これらの動きは、高度経済成長期にある1955～1965年まで5万人以上の地域と1万人未満の地域が増加する形で進んだ両極分化傾向が、1970年以降成長期の中で5万人以上の地域と5千人未満の地域の両極分化として、より不均等な形で進展していることを示している。

しかも、5万人以上の市町村は、5万人～30万人未満の中規模地域だけでなく、30万～100万人未満の大規模地域、100万人以上の超大規模地域のいずれも確実に増加し、より大規模な地域へと人口が集中する傾向がうかがえる。その結果、2000年現在、全市町村の0.4％を占めるにすぎない100万人以上の超大規模地域に全人口の約21.2％が集中するというきわめて不均等な事態が進展するに至っている。

ちなみに、2000年現在、人口規模最大の東京都特別区部（8,134,688人）と最も人口規模最大の東京都青ヶ島村（203人）との格差は40,072倍にまで達している。また、100万人以上の超大規模地域は2000年現在、札幌、仙台、東京特別区、横浜、川崎、名古屋、京都、大阪、神戸、広島、北九州、福岡の12市（区）であるが、逆に県人口が100万人以下たところが7県（福井：828,944人）、山梨：888,172人）、島根：613,289人）、島根：761,503人）、鳥取：824,108人）、高知：813,949人）、佐賀：876,654人）もあつ。この点からみても人口の不均等発展のすさまじさが指摘できるよう。

こうした市町村人口の不均等発展を都道府県別にみると、人口規模の異なる市町村がそれぞれ特定の都道府県に集中する傾向が明らかになる（表3-13）。

すなわち、1955年段階では1万～5万人未満の小規模市町村がもっとも多い都道府県が36県と4分の3以上、そのうち自県内の半分以上の市町村が小規模地域に該当する都道府県も27にのぼっていた。この段階では小規模市町村がどの都道府県においても主流であった。ところが、1960・1965年には1万人未満の市町村がもっとも多い都道府県が増加し、さらに、1965年には新たに大阪のように中規模市町村がもっとも多いところが増えるようになった。こうした傾向は1970年まで続き、この段階中規模市町村がもっとも多い都道府県が東京、大阪の2つ、小規模市町村がもっとも多いのが16県、零細規模市町村がもっとも多い県が23県となった。小規模市町村がもっとも多い都道府県が、中規模市町村にモードがある少数の都道府県と零細市町村にモードがある多数の都道府県に両極分化したのである。これは明らかに過密・過疎という形での市町村人口の不均等発展がどの都道府県においても同様に進展したのではなく、過疎化によって入口が減少する市町村と人口が増大する市町村が主としてそれぞれ別々の都道府県に集中していたことを示している。
ところが1970年以降、それまでとは異なり、こうした変化はほとんど見られなくななる。実際、1970年から現在まで中規模市町村がもっとも多い都道府県は2～3県にとどまり、小規模市町村がモードの都道府県や零細規模市町村がモードの都道府県もそれぞれ16～19、26～29の間を推移しているにすぎない。したがって、人口規模別市町村の割合から見た都道府県間の両極分解傾向は低成長期以降ほぼ停止したように見える。しかし、零細規模市町村がもっとも多い都道府県の中で、5千人未満規模市町村が5千人～1万人未満規模市町村よりも多く存在するものを見ると、1970年の3県（山梨、長野、岐阜）から4県（1975年／山梨、岐阜、高知、沖縄）→7県（1980年／山梨、長野、岐阜、広島、高知、大分、沖縄）→9県（1985・1990年／山梨、長野、岐阜、奈良、広島、愛媛、高知、大分、沖縄）→10県（1995年／北海道、山梨、長野、岐阜、鳥根、広島、愛媛、高知、大分、沖縄）と実に増加していることも見過ごしてはならない（ちなみに、1970年以前はこれに該当する県は1955年に山梨が存在したのみである）。低成長期以降、中規模・小規模・零細規模という枠組みで見ると変化は見られないが、零細規模市町村がモードの県において多くの市町村がよりいっそう人口を減少させているのである。これゆえ、この点からいえば、人口規模別市町村構成比から見た都道府県間の不均等発展の動きはもっとも達成しているのが当座である。その結果、2000年現在、一方で埼玉、東京、大阪で中規模市町村がモードになり（うち東京、大阪で半数以上の市町村が中規模市町村）、他方でその対極に零細規模市町村がモードでしかも5千人未満が零細規模市町村の過半数を占める11県（上述）が位置するようになっている。

しかし、零細規模市町村がもっとも多い都道府県の中には、零細規模市町村が支配的になかなかない、北海道、京都、広島のように人口10万人以上の超大規模地域が存在している都道府県もある。北海道、広島は零細規模市町村がそれぞれ69.3%、61.6%、これに1万人～5万人未満の小規模地域を加えると実は92.5%、90.7%に達する中で、札幌市や広島市だけが超大規模地域（1,822,368人、1,126,239人）として飛び抜けて存在している。逆に、中規模以上の地域がもっとも多い埼玉、東京、大阪にも零細規模地域が存在している。それゆえ、こうした事実は、特定の人口規模タイプの市町村が特定の都道府県に集中する傾向を示すとともに、特定タイプの市町村が集中する都道府県内においても、市町村間の人口規模の不均等発展が大きく進んでいることを意味している。

こうして、市町村人口の不均等発展は、第一に、市町村間の不均等、第二に特定都道府県への特定規模人口市町村の集中、第三に都道府県内の市町村間の不均等という三つの視点から検討されなければならないということになる。

第6節 市町村を単位とする地域社会類型

第1項 地域社会類型（細類型）の特徴

さて、それまでは、以上のような5つの次元・指標を統合し、市町村を単位とする地域社会類型を設定してみよう。そこには、いかなる特徴がみられるのであろうか。ただし、1965年以前は生産力（所得）指標が公表されていないため、4つの次元・指標のみを統合した特徴を検討する。

いま、すべての指標が公表されている1970年以降と生産力（所得）指標が存在しない1965年以前にわけ、4つないし5つの次元・指標を統合すると、表3-14、表3-15の如くなる。そこから、まず4つの次元・指標を統合した1965年以前には134の類型、5つの次元・指標を統合した1970年以降は358の類型が現実に存在したことがわかる。


— 29 —
転したのである。

しかし、ここで注意する必要があるのは、こうした事態が1980年以降地域社会が全体として共通性を高めてきていることを単純に意味付けていないことである。なぜなら、年々もしくは数多くの類型が存在するが、その多くはごくわずかの市町村から構成されているからであり、類型数の多少だけで地域社会の共通性の高まりを判断することはできないからである。したがって、ここでは、さらに特定の類型へから市町村の集中のあり方がどのように変化して来たかという点も検討する必要がある。

表3-17はこの点を明らかにするために、各年の類型数に対する累積度数50%以内の主要類型一覧を見たものである。

ここから、1955年に市町村数がもっとも多い類型は生産関係が後進的で小規模な閉鎖的農業地域（類型番号2）であったことがわかる。この類型に属する市町村数は、1,345で全体の42.4%を占めていた。これに市町村数が第二位の類型番号1（30.2%）をあわせると、2つの類型で実に全市町村の72.6%にのぼっていた。しかも、市町村数が第二位の類型は人口規模が零細になっただけで他の指標はすべて第一位の類型と同じで、両者の間に大きな差異は見いだせない。この時点では、まさに典型的な農村社会としての特性をもつ市町村がほとんどであったといえる。その後、1960年→1965年になっても、この2つの類型が市町村数でついで、主にこの2つだけで累積度数が50%を超える点は変わらないかった。

しかし、これらの類型に属する市町村の割合は確実に低下していった。5つの次元・指標を統合した1970年以降、そうした傾向はよりっそう強まっている。①実際、1970年の段階で3つの類型（類型番号1、2、159）だけで全市町村の半分以上を占めていたものが、1975年には累積度数が50%に達するのに5類型（類型番号1、158、159、2、6）が必要になった。さらに、1980→1985→1990→1995→2000年になるにしたがって、6→8→11→13→13とより多くの類型を合計しなければ市町村の過半数に達しなくなっている。②しかも、各年の上位3位は直近の時点の上位3位と比べるとほぼいずれも市町村の構成が低下している。したがって、特定類型に多くの市町村が集中する傾向は確実に弱まっている。③そのうえ、累積度数50%以内の類型の各次元に注目すると、1970〜2000年まで生産力（所得）は低位で人口規模は零細規模か小規模の類型しか存在しないが、他の次元はいずれも多様化傾向を示している。それは資本一貫労働関係が後進的なものから中間的・先進的なものへ、農業地域から複合型をはじめとする他の産業域へという各類型間の絶対的相対的地位の変化によってもたらされたものである。

こうして、各市町村の特定類型への集中傾向から見ると、1955年から現在まで一貫して多様化傾向が進展していることが明らかになる。したがって、総類型数の推移から見ると、1955年から1980年まで進んだ多様化傾向が1980年以降逆の傾向に転じるように見えるが、類型の内訳の変化から判断すると、多様化傾向は実際には現在まで貫かれており、むしろ類型の多様化のあり方はより強まっているといえる。

ここで忘れてはならないことは、第一に、こうした一貫した類型の多様化傾向の中で、かつて圧倒的な地位を占めていた典型的な農村社会としての特性をもつ類型が、確実にその地位を低下させてきていることである。

実際、1975年まではもっとも市町村数の多い類型は農業主導型の類型であったが、1980年以降複合型の産業構造をとる類型がこの地位をつくようになった。2000年には工業を産業構造とする開放的で先進資本主義的な低生産力小規模域（類型番号88）がトップになっている。

とはいえ、第二に、それは農村社会から工業主導型の地域社会へ市町村が移行したことも意味してはいない。工業主導型の産業構造をとる類型が上位に登場するのは1985年になってからであり、その数もわずかである。2000年にトップの地位にいたもののが6.5%にすぎない。それに次いで上位に位置する12位の工業主導型（2.7%）を合わせても1割に達しない。

むしろ、第三に、現時点では農業地域にかかわって生産力が低く先進・中進資本主義的な生産関係をとる小規模・零細のサービス業地域や生産力が低く先進・中進資本主義的な生産関係をとれない小規模・零細の複合型産業地域が重要な類型になっている。前者の特徴をもっとサービス業地域（288、289、283、271、284）を合わせると22.8%、後者の特徴をもつ複合型地域（158、162、172、163）は合わせて全体の13.3%に達する。
<table>
<thead>
<tr>
<th>年度</th>
<th>市町村の地域社会類型（細類型）の推移/1955～1965年</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>生産関係</td>
<td>農業主導型</td>
</tr>
<tr>
<td>開放性</td>
<td>閉鎖</td>
</tr>
<tr>
<td>関東</td>
<td>開放</td>
</tr>
<tr>
<td>1955</td>
<td>958</td>
</tr>
<tr>
<td>1960</td>
<td>971</td>
</tr>
<tr>
<td>1965</td>
<td>1014</td>
</tr>
<tr>
<td>構造</td>
<td>29.7</td>
</tr>
<tr>
<td>成長</td>
<td>30.1</td>
</tr>
<tr>
<td>稀少</td>
<td>31.4</td>
</tr>
<tr>
<td>産業構造</td>
<td>农業主導型</td>
</tr>
<tr>
<td>生産関係</td>
<td>開放</td>
</tr>
<tr>
<td>関東</td>
<td>開放</td>
</tr>
<tr>
<td>1955</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>1960</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>1965</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>構造</td>
<td>0.1</td>
</tr>
<tr>
<td>成長</td>
<td>0.0</td>
</tr>
<tr>
<td>稀少</td>
<td>0.1</td>
</tr>
<tr>
<td>産業構造</td>
<td>平</td>
</tr>
<tr>
<td>----------</td>
<td>---</td>
</tr>
<tr>
<td>生産面係</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>開放性</td>
<td>開</td>
</tr>
<tr>
<td>人口規模</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>順位番号</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>市</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>郡</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>村</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>産業構造</th>
<th>商業主導型</th>
<th>サービス業主導型</th>
<th>公務主導型</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>生産面係</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>開放性</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>人口規模</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>順位番号</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>市</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>郡</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>村</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>年度</td>
<td>県</td>
<td>市</td>
<td>区</td>
</tr>
<tr>
<td>------</td>
<td>----</td>
<td>----</td>
<td>----</td>
</tr>
<tr>
<td>1970</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>1975</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>1980</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>1985</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>1990</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>1995</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>2000</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>産業構造</td>
<td>林業主要型</td>
<td>造業主要型</td>
<td>鉱業主要型</td>
</tr>
<tr>
<td>----------</td>
<td>-----------</td>
<td>-----------</td>
<td>-----------</td>
</tr>
<tr>
<td>1970</td>
<td>2 4</td>
<td>19 5 12 6</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>1975</td>
<td>2 5 1</td>
<td>14 1 19 5</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>1980</td>
<td>5 1</td>
<td>12 1 16 5</td>
<td>1 1 2</td>
</tr>
<tr>
<td>1985</td>
<td>8 24 4</td>
<td>1</td>
<td>1 2</td>
</tr>
<tr>
<td>1990</td>
<td>8 20 4</td>
<td>1</td>
<td>1 2</td>
</tr>
<tr>
<td>1995</td>
<td>4 22 2</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>2000</td>
<td>2 18 2</td>
<td>1</td>
<td>5</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>類型番号</th>
<th>33 34 35</th>
<th>36 37 38</th>
<th>39 40 41</th>
<th>42 43 44</th>
<th>45 46 47</th>
<th>48 49 50</th>
<th>51 52 53</th>
<th>54 55 56</th>
<th>57 58 59</th>
<th>60 61 62</th>
<th>63 64 65</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1970</td>
<td>0.1 0.1</td>
<td>0.6 0.2</td>
<td>0.4 0.2</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
</tr>
<tr>
<td>1975</td>
<td>0.1 0.2</td>
<td>0.4 0.0</td>
<td>0.6 0.2</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
</tr>
<tr>
<td>1980</td>
<td>0.2 0.0</td>
<td>0.4 0.0</td>
<td>0.5 0.2</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
</tr>
<tr>
<td>1985</td>
<td>0.2 0.7</td>
<td>0.1 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
</tr>
<tr>
<td>1990</td>
<td>0.2 0.6</td>
<td>0.1 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
</tr>
<tr>
<td>1995</td>
<td>0.1 0.7</td>
<td>0.1 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
</tr>
<tr>
<td>2000</td>
<td>0.1 0.6</td>
<td>0.1 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
<td>0.0 0.0</td>
</tr>
<tr>
<td>産業構造 建設</td>
<td>工業</td>
<td>主導型</td>
<td>生産力 超高</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>---</td>
<td>---</td>
<td>---</td>
<td>---</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>生産関係</td>
<td>先進</td>
<td>後進</td>
<td>中</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>開放性</td>
<td>閉鎖</td>
<td>閉鎖</td>
<td>開放</td>
<td>ベッド</td>
<td>求心</td>
<td>拡散</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>人口規模</td>
<td>貧経</td>
<td>貧経</td>
<td>小</td>
<td>貧経</td>
<td>小</td>
<td>中</td>
<td>貧経</td>
<td>小</td>
<td>中</td>
<td>貧経</td>
<td>小</td>
</tr>
<tr>
<td>類型番号</td>
<td>66</td>
<td>67</td>
<td>68</td>
<td>69</td>
<td>70</td>
<td>71</td>
<td>72</td>
<td>73</td>
<td>74</td>
<td>75</td>
<td>76</td>
</tr>
<tr>
<td>1970</td>
<td>7</td>
<td>1</td>
<td>9</td>
<td>48</td>
<td>31</td>
<td>1</td>
<td>6</td>
<td>11</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>1975</td>
<td>1</td>
<td>6</td>
<td>5</td>
<td>29</td>
<td>53</td>
<td>37</td>
<td>17</td>
<td>35</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>1980</td>
<td>5</td>
<td>3</td>
<td>33</td>
<td>59</td>
<td>31</td>
<td>1</td>
<td>27</td>
<td>50</td>
<td>9</td>
<td>3</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>1985</td>
<td>5</td>
<td>3</td>
<td>29</td>
<td>45</td>
<td>29</td>
<td>1</td>
<td>36</td>
<td>52</td>
<td>6</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>1990</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>30</td>
<td>27</td>
<td>4</td>
<td>1</td>
<td>38</td>
<td>55</td>
<td>4</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>1995</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>22</td>
<td>22</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>11</td>
<td>29</td>
<td>23</td>
<td>2</td>
<td>91</td>
</tr>
<tr>
<td>2000</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>6</td>
<td>5</td>
<td>1</td>
<td>8</td>
<td>16</td>
<td>14</td>
<td>2</td>
<td>88</td>
<td>211</td>
</tr>
<tr>
<td>1970</td>
<td>0.2</td>
<td>0.2</td>
<td>0.0</td>
<td>0.3</td>
<td>1.5</td>
<td>1.0</td>
<td>0.0</td>
<td>0.2</td>
<td>0.3</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
</tr>
<tr>
<td>1975</td>
<td>0.0</td>
<td>0.2</td>
<td>0.2</td>
<td>0.9</td>
<td>1.6</td>
<td>1.1</td>
<td>0.5</td>
<td>1.1</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>0.1</td>
</tr>
<tr>
<td>1980</td>
<td>0.2</td>
<td>0.1</td>
<td>1.0</td>
<td>1.8</td>
<td>1.0</td>
<td>0.0</td>
<td>0.8</td>
<td>1.5</td>
<td>0.3</td>
<td>0.1</td>
<td>0.1</td>
</tr>
<tr>
<td>1985</td>
<td>0.2</td>
<td>0.1</td>
<td>0.9</td>
<td>1.4</td>
<td>0.5</td>
<td>1.1</td>
<td>1.6</td>
<td>0.2</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>0.2</td>
</tr>
<tr>
<td>1990</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>0.9</td>
<td>0.8</td>
<td>0.1</td>
<td>1.2</td>
<td>1.7</td>
<td>0.1</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
</tr>
<tr>
<td>1995</td>
<td>0.1</td>
<td>0.1</td>
<td>0.7</td>
<td>0.7</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>0.3</td>
<td>0.9</td>
<td>0.7</td>
<td>0.1</td>
<td>2.8</td>
</tr>
<tr>
<td>2000</td>
<td>0.1</td>
<td>0.1</td>
<td>0.2</td>
<td>0.2</td>
<td>0.1</td>
<td>0.2</td>
<td>0.5</td>
<td>0.4</td>
<td>0.1</td>
<td>2.7</td>
<td>6.5</td>
</tr>
<tr>
<td>年代</td>
<td>開放性</td>
<td>戻</td>
<td>開放</td>
<td>ベッド</td>
<td>求心</td>
<td>戻</td>
<td>開放</td>
<td>ベッド</td>
<td>求心</td>
<td>超産動</td>
<td>戻</td>
</tr>
<tr>
<td>------</td>
<td>--------</td>
<td>---</td>
<td>------</td>
<td>------</td>
<td>------</td>
<td>---</td>
<td>------</td>
<td>------</td>
<td>------</td>
<td>------</td>
<td>---</td>
</tr>
<tr>
<td>1970</td>
<td>7</td>
<td>17</td>
<td>7</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>10</td>
<td>13</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>21</td>
<td>15</td>
</tr>
<tr>
<td>1975</td>
<td>4</td>
<td>18</td>
<td>5</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>9</td>
<td>21</td>
<td>6</td>
<td>2</td>
<td>39</td>
<td>14</td>
</tr>
<tr>
<td>1980</td>
<td>2</td>
<td>13</td>
<td>3</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>13</td>
<td>2</td>
<td>6</td>
<td>38</td>
<td>14</td>
</tr>
<tr>
<td>1985</td>
<td>1</td>
<td>7</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>6</td>
<td>3</td>
<td>45</td>
<td>6</td>
<td>1</td>
<td>24</td>
<td>13</td>
</tr>
<tr>
<td>1990</td>
<td>1</td>
<td>5</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>2</td>
<td>4</td>
<td>26</td>
<td>13</td>
</tr>
<tr>
<td>1995</td>
<td>1</td>
<td>5</td>
<td>3</td>
<td>2</td>
<td>26</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>1</td>
<td>13</td>
<td>8</td>
<td>13</td>
</tr>
<tr>
<td>2000</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>2</td>
<td>4</td>
<td>26</td>
<td>15</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>6</td>
<td>27</td>
<td>13</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>年代</th>
<th>類型番号</th>
<th>大</th>
<th>中</th>
<th>小</th>
<th>前</th>
<th>小</th>
<th>小</th>
<th>小</th>
<th>小</th>
<th>小</th>
<th>小</th>
<th>小</th>
<th>小</th>
<th>小</th>
<th>小</th>
<th>小</th>
<th>小</th>
<th>小</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1970</td>
<td>99</td>
<td>100</td>
<td>101</td>
<td>102</td>
<td>103</td>
<td>104</td>
<td>105</td>
<td>106</td>
<td>107</td>
<td>108</td>
<td>109</td>
<td>110</td>
<td>111</td>
<td>112</td>
<td>113</td>
<td>114</td>
<td>115</td>
<td>116</td>
</tr>
<tr>
<td>1975</td>
<td>4</td>
<td>9</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>8</td>
<td>5</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>9</td>
<td>21</td>
<td>6</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>39</td>
<td>41</td>
<td>6</td>
<td>14</td>
</tr>
<tr>
<td>1980</td>
<td>2</td>
<td>4</td>
<td>2</td>
<td>7</td>
<td>3</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>16</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>33</td>
<td>46</td>
<td>6</td>
<td>14</td>
<td>20</td>
</tr>
<tr>
<td>1985</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>5</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>13</td>
<td>2</td>
<td>6</td>
<td>38</td>
<td>55</td>
<td>5</td>
<td>22</td>
<td>23</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>1990</td>
<td>1</td>
<td>6</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>24</td>
<td>45</td>
<td>6</td>
<td>1</td>
<td>20</td>
<td>26</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>16</td>
<td>14</td>
<td>1</td>
<td>22</td>
</tr>
<tr>
<td>1995</td>
<td>1</td>
<td>5</td>
<td>3</td>
<td>26</td>
<td>46</td>
<td>4</td>
<td>16</td>
<td>22</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>5</td>
<td>27</td>
<td>14</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2000</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>2</td>
<td>4</td>
<td>26</td>
<td>48</td>
<td>15</td>
<td>113</td>
<td>8</td>
<td>4</td>
<td>6</td>
<td>27</td>
<td>13</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>産業構造</td>
<td>工業</td>
<td>主導型</td>
<td>産業</td>
<td>運輸・通信業</td>
<td>産業</td>
<td>価値</td>
<td>生産部門</td>
<td>複合型</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>----------</td>
<td>------</td>
<td>--------</td>
<td>------</td>
<td>-------------</td>
<td>------</td>
<td>------</td>
<td>----------</td>
<td>--------</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>生産力</td>
<td>高</td>
<td>生産力</td>
<td>低</td>
<td>生産力</td>
<td>高</td>
<td>生産力</td>
<td>低</td>
<td>生産力</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>生産関係</td>
<td>開放</td>
<td>開放</td>
<td>求心</td>
<td>開放</td>
<td>求心</td>
<td>開放</td>
<td>求心</td>
<td>開放</td>
<td>求心</td>
<td>開放</td>
<td>求心</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>開放性</td>
<td>開放</td>
<td>開放</td>
<td>求心</td>
<td>開放</td>
<td>求心</td>
<td>開放</td>
<td>求心</td>
<td>開放</td>
<td>求心</td>
<td>開放</td>
<td>求心</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>人口規模</td>
<td>小</td>
<td>大</td>
<td>超大</td>
<td>小</td>
<td>中</td>
<td>大</td>
<td>超大</td>
<td>小</td>
<td>中</td>
<td>大</td>
<td>超大</td>
<td>小</td>
<td>中</td>
<td>大</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>順序番号</td>
<td>130</td>
<td>131</td>
<td>132</td>
<td>133</td>
<td>134</td>
<td>135</td>
<td>136</td>
<td>137</td>
<td>139</td>
<td>140</td>
<td>141</td>
<td>142</td>
<td>143</td>
<td>144</td>
<td>146</td>
<td>147</td>
<td>148</td>
<td>149</td>
</tr>
<tr>
<td>1970</td>
<td>1</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>19</td>
<td>5</td>
<td>3</td>
<td>16</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>64</td>
<td>64</td>
<td>5</td>
<td>1</td>
<td>200</td>
</tr>
<tr>
<td>1975</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>10</td>
<td>2</td>
<td>5</td>
<td>7</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>45</td>
<td>43</td>
<td>7</td>
<td>1</td>
<td>319</td>
</tr>
<tr>
<td>1980</td>
<td>6</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>27</td>
<td>15</td>
<td>1</td>
<td>414</td>
<td>301</td>
<td>20</td>
</tr>
<tr>
<td>1985</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>5</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>7</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>18</td>
<td>7</td>
<td>3</td>
<td>386</td>
<td>224</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>1990</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>8</td>
<td>1</td>
<td>12</td>
<td>1</td>
<td>349</td>
<td>175</td>
<td>3</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1995</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>257</td>
<td>82</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2000</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>131</td>
<td>30</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

<p>| 1970 | 0.0 | 0.2 | 0.2 | 0.2 | 0.1 | 0.5 | 0.1 | 0.0 | 0.0 | 0.1 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 1975 | 0.0 | 0.1 | 0.3 | 0.1 | 0.2 | 0.2 | 0.1 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 1980 | 0.2 | 0.0 | 0.1 | 0.1 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 1985 | 0.0 | 0.0 | 0.2 | 0.0 | 0.0 | 0.1 | 0.1 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 1990 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.1 | 0.1 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 1995 | 0.0 | 0.1 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 2000 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |</p>
<table>
<thead>
<tr>
<th>産業構造</th>
<th>価 値 生 産 部 門</th>
<th>複 合 型</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>生 産 力</td>
<td>低 生 産 力</td>
<td>高 生 産 力</td>
</tr>
<tr>
<td>生産関係</td>
<td>産 本</td>
<td>先 進</td>
</tr>
<tr>
<td>開放性</td>
<td>開放</td>
<td>ベッド</td>
</tr>
<tr>
<td>人口規模</td>
<td>小</td>
<td>中</td>
</tr>
<tr>
<td>類型番号</td>
<td>162</td>
<td>165</td>
</tr>
<tr>
<td>1970</td>
<td>24</td>
<td>28</td>
</tr>
<tr>
<td>1975</td>
<td>56</td>
<td>74</td>
</tr>
<tr>
<td>1980</td>
<td>99</td>
<td>135</td>
</tr>
<tr>
<td>1985</td>
<td>137</td>
<td>189</td>
</tr>
<tr>
<td>1990</td>
<td>184</td>
<td>146</td>
</tr>
<tr>
<td>1995</td>
<td>192</td>
<td>109</td>
</tr>
<tr>
<td>2000</td>
<td>115</td>
<td>73</td>
</tr>
<tr>
<td>1970</td>
<td>0.7</td>
<td>0.9</td>
</tr>
<tr>
<td>1975</td>
<td>1.7</td>
<td>2.3</td>
</tr>
<tr>
<td>1980</td>
<td>3.1</td>
<td>4.2</td>
</tr>
<tr>
<td>1985</td>
<td>4.2</td>
<td>5.6</td>
</tr>
<tr>
<td>1990</td>
<td>5.7</td>
<td>4.5</td>
</tr>
<tr>
<td>1995</td>
<td>5.9</td>
<td>3.4</td>
</tr>
<tr>
<td>2000</td>
<td>3.6</td>
<td>2.3</td>
</tr>
<tr>
<td>産業構造</td>
<td>高値生産力</td>
<td>階級</td>
</tr>
<tr>
<td>----------</td>
<td>------------</td>
<td>------</td>
</tr>
<tr>
<td>生産力</td>
<td>高生産力</td>
<td>超高生産力</td>
</tr>
<tr>
<td>生産関係</td>
<td>開放性</td>
<td>開放</td>
</tr>
<tr>
<td>開放性</td>
<td>開放</td>
<td>開放</td>
</tr>
<tr>
<td>人口規模</td>
<td>階級</td>
<td>小</td>
</tr>
<tr>
<td>類型番号</td>
<td>195</td>
<td>196</td>
</tr>
<tr>
<td>1970</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>1975</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>1980</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>1985</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>1990</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>1995</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>2000</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>1970</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
</tr>
<tr>
<td>1975</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
</tr>
<tr>
<td>1980</td>
<td>0.0</td>
<td>0.1</td>
</tr>
<tr>
<td>1985</td>
<td>0.1</td>
<td>0.1</td>
</tr>
<tr>
<td>1990</td>
<td>0.0</td>
<td>0.1</td>
</tr>
<tr>
<td>1995</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
</tr>
<tr>
<td>2000</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（レーチングデータ）
<table>
<thead>
<tr>
<th>産業構造</th>
<th>商業</th>
<th>主導型</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>生産力</td>
<td>低生産力</td>
<td>高生産力</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>生産力</th>
<th>開放性</th>
<th>開放</th>
<th>売手</th>
<th>販売機能</th>
<th>開放</th>
<th>開放</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>先進</td>
<td>開放</td>
<td>売手</td>
<td>販売機能</td>
<td>開放</td>
<td>開放</td>
<td>開放</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>市</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>1</td>
<td>6</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>10</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>町</td>
<td>8</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>村</td>
<td>5</td>
<td>4</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>数</td>
<td>10</td>
<td>10</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1970</td>
<td>0.0</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
<td>0.2</td>
<td>0.0</td>
<td>0.2</td>
<td>0.0</td>
<td>0.2</td>
<td>0.0</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1975</td>
<td>0.1</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
<td>0.2</td>
<td>0.0</td>
<td>0.2</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
<td>0.1</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1980</td>
<td>0.2</td>
<td>0.3</td>
<td>0.0</td>
<td>0.2</td>
<td>0.0</td>
<td>0.4</td>
<td>0.3</td>
<td>0.4</td>
<td>0.1</td>
<td>0.2</td>
<td>0.1</td>
<td>0.1</td>
<td>0.3</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1985</td>
<td>0.2</td>
<td>0.4</td>
<td>0.0</td>
<td>0.2</td>
<td>0.1</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
<td>0.2</td>
<td>0.1</td>
<td>0.1</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1990</td>
<td>0.0</td>
<td>0.3</td>
<td>0.0</td>
<td>0.2</td>
<td>0.0</td>
<td>0.2</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1995</td>
<td>0.1</td>
<td>0.6</td>
<td>0.0</td>
<td>0.2</td>
<td>0.0</td>
<td>0.2</td>
<td>0.0</td>
<td>0.1</td>
<td>0.2</td>
<td>0.0</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2000</td>
<td>0.1</td>
<td>0.5</td>
<td>0.0</td>
<td>0.2</td>
<td>0.0</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>0.2</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>0.1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>産業構造</td>
<td>商業主導型</td>
<td></td>
<td></td>
<td>サービス業主導型</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>---</td>
<td>---</td>
<td>---</td>
<td>---</td>
<td>---</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>生産力</td>
<td>超高生産力</td>
<td></td>
<td></td>
<td>低生産力</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>生産関係</th>
<th>先進</th>
<th>後進</th>
<th>中進</th>
<th>先進</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>開放性</td>
<td>開放</td>
<td>開放</td>
<td>開放</td>
<td>開放</td>
</tr>
</tbody>
</table>

| 1970 | 1 | 2 | 2 | 15 | 27 | 4 | 1 | 2 | 1 | 3 | 4 | 3 | 2 |
| 1975 | 1 | 1 | 1 | 5 | 3 | 5 | 4 | 13 | 8 | 2 | 3 | 7 | 3 |
| 1980 | 1 | 1 | 1 | 1 | 14 | 2 | 1 | 1 | 18 | 6 | 2 | 5 | 11 | 3 |
| 1985 | 1 | 1 | 2 | 6 | 4 | 1 | 2 | 25 | 24 | 7 | 14 | 23 | 7 |
| 1990 | 3 | 1 | 3 | 4 | 2 | 3 | 1 | 43 | 44 | 18 | 1 | 25 | 52 | 12 |
| 1995 | 1 | 2 | 1 | 112 | 51 | 63 | 22 | 5 | 1 | 1 | 83 | 90 | 45 | 9 | 2 | 77 | 103 | 23 | 1 | 1 |
| 2000 | 1 | 1 | 1 | 131 | 28 | 62 | 19 | 1 | 133 | 120 | 57 | 13 | 4 | 188 | 163 | 43 | 2 |
| 1970 | 0.0 | 0.0 | 0.1 | 0.1 | 0.5 | 0.8 | 0.0 | 0.1 | 0.0 | 0.1 | 0.1 | 0.1 |
| 1975 | 0.0 | 0.0 | 0.1 | 0.0 | 0.2 | 0.1 | 0.0 | 0.1 | 0.0 | 0.1 | 0.2 | 0.1 |
| 1980 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.2 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.1 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 1985 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.2 | 0.1 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 1990 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.2 | 0.1 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 1995 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.2 | 0.1 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 2000 | 0.0 | 0.0 | 0.1 | 0.9 | 1.0 | 1.9 | 0.6 | 0.0 | 4.1 | 3.7 | 1.8 | 0.4 | 0.1 |

---

```
```

---
<table>
<thead>
<tr>
<th>床種</th>
<th>人口規模</th>
<th>類型番号</th>
<th>生産力</th>
<th>生産力</th>
<th>生産力</th>
<th>生産力</th>
<th>生産力</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>先進</td>
<td>中進</td>
<td>中進</td>
<td>先進</td>
<td>中進</td>
<td>中進</td>
<td>先進</td>
<td>中進</td>
</tr>
<tr>
<td>開放性</td>
<td>ベッド</td>
<td>超</td>
<td>超</td>
<td>開放</td>
<td>開放</td>
<td>開放</td>
<td>ベッド</td>
</tr>
<tr>
<td>床種</td>
<td>小</td>
<td>中</td>
<td>中</td>
<td>小</td>
<td>中</td>
<td>小</td>
<td>小</td>
</tr>
<tr>
<td>類型番号</td>
<td>293</td>
<td>294</td>
<td>295</td>
<td>296</td>
<td>297</td>
<td>298</td>
<td>299</td>
</tr>
<tr>
<td>1970</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>1975</td>
<td>3</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>1980</td>
<td>4</td>
<td>8</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>1985</td>
<td>7</td>
<td>18</td>
<td>2</td>
<td>5</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>1990</td>
<td>10</td>
<td>33</td>
<td>3</td>
<td>5</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>1995</td>
<td>23</td>
<td>46</td>
<td>9</td>
<td>4</td>
<td>8</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>2000</td>
<td>46</td>
<td>65</td>
<td>13</td>
<td>1</td>
<td>9</td>
<td>20</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>1970</td>
<td>0.0</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
</tr>
<tr>
<td>1975</td>
<td>0.1</td>
<td>0.1</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
</tr>
<tr>
<td>1980</td>
<td>0.1</td>
<td>0.2</td>
<td>0.0</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>0.1</td>
</tr>
<tr>
<td>1985</td>
<td>0.2</td>
<td>0.6</td>
<td>0.1</td>
<td>0.1</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
<td>0.1</td>
</tr>
<tr>
<td>1990</td>
<td>0.3</td>
<td>1.0</td>
<td>0.1</td>
<td>0.2</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
</tr>
<tr>
<td>1995</td>
<td>0.7</td>
<td>1.4</td>
<td>0.3</td>
<td>0.2</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
</tr>
<tr>
<td>2000</td>
<td>1.4</td>
<td>2.0</td>
<td>0.4</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>0.3</td>
<td>0.6</td>
</tr>
<tr>
<td>産業構造</td>
<td>サービス業主</td>
<td>専門</td>
<td>公務主</td>
<td>専門</td>
<td>金融・保険業主</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>----------</td>
<td>--------------</td>
<td>------</td>
<td>--------</td>
<td>------</td>
<td>----------------</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>生産力</td>
<td>超高 生産力</td>
<td>高 生産力</td>
<td>低 生産力</td>
<td>超高 生産力</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>生産関係</td>
<td>先進</td>
<td>中進</td>
<td>先進</td>
<td>中進</td>
<td>先進</td>
<td>中進</td>
<td>先進</td>
</tr>
<tr>
<td>開放性</td>
<td>閉鎖</td>
<td>開放</td>
<td>ベッド</td>
<td>超流</td>
<td>閉鎖</td>
<td>開放</td>
<td>閉鎖</td>
</tr>
<tr>
<td>人 口 集 難</td>
<td>集難</td>
<td>中</td>
<td>中</td>
<td>大</td>
<td>超大</td>
<td>中</td>
<td>中</td>
</tr>
<tr>
<td>1970</td>
<td>1</td>
<td>6</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>1975</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>7</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>1980</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>9</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>1985</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>12</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>1990</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>2</td>
<td>4</td>
<td>15</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>1995</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>15</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>2000</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>7</td>
<td>3</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>1970</td>
<td>0.0</td>
<td>0.2</td>
<td>0.0</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
</tr>
<tr>
<td>1975</td>
<td>0.0</td>
<td>0.1</td>
<td>0.2</td>
<td>0.0</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
</tr>
<tr>
<td>1980</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
<td>0.3</td>
<td>0.0</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
</tr>
<tr>
<td>1985</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
<td>0.1</td>
<td>0.4</td>
<td>0.0</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
</tr>
<tr>
<td>1990</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
<td>0.1</td>
<td>0.1</td>
<td>0.1</td>
<td>0.1</td>
<td>0.1</td>
</tr>
<tr>
<td>1995</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>0.1</td>
<td>0.1</td>
<td>0.5</td>
<td>0.1</td>
<td>0.3</td>
</tr>
<tr>
<td>2000</td>
<td>0.1</td>
<td>0.0</td>
<td>0.1</td>
<td>0.1</td>
<td>0.2</td>
<td>0.1</td>
<td>0.3</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）ここでは、5つの次元の全てのデータがそろっているものののみを対象にしている。
表3-16 総地域社会類型（細類型）数の推移

<table>
<thead>
<tr>
<th>年</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1955</td>
<td>93</td>
</tr>
<tr>
<td>1960</td>
<td>102</td>
</tr>
<tr>
<td>1970</td>
<td>172</td>
</tr>
<tr>
<td>1975</td>
<td>198</td>
</tr>
<tr>
<td>1980</td>
<td>214</td>
</tr>
<tr>
<td>1985</td>
<td>200</td>
</tr>
<tr>
<td>1990</td>
<td>196</td>
</tr>
<tr>
<td>1995</td>
<td>180</td>
</tr>
<tr>
<td>2000</td>
<td>184</td>
</tr>
</tbody>
</table>

表3-17 主要類型一覧（累積度数50%以内）

<table>
<thead>
<tr>
<th>年</th>
<th>累積度数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1955</td>
<td>1345</td>
</tr>
<tr>
<td>1960</td>
<td>1422</td>
</tr>
<tr>
<td>1965</td>
<td>1521</td>
</tr>
<tr>
<td>1970</td>
<td>1626</td>
</tr>
<tr>
<td>1975</td>
<td>1729</td>
</tr>
<tr>
<td>1980</td>
<td>1831</td>
</tr>
<tr>
<td>1985</td>
<td>1935</td>
</tr>
<tr>
<td>1990</td>
<td>2039</td>
</tr>
<tr>
<td>1995</td>
<td>2143</td>
</tr>
<tr>
<td>2000</td>
<td>2247</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注）年毎の合計推移の数値はその年の類型パターンの推移を示す。
以上のようにな、各次元・指標を統合した地域社会類型のあり方からみた場合、各市町村は多様な特徴をもつようになってきていること、しかし、それは決して農村的な地域社会から工業を中心とする地域社会が生まれたことを意味するのではなく、むしろ生産力の低い小・零細な複合型産業地域やサービス業地域が数多く生み出されたことを意味していることが明らかになる。

第2項 地域社会類型（大類型・小類型）の特徴
ところで、こうした形で設定された地域社会類型（細類型）を基本的に都道府県で行った手順にしたがって大きくくくると、表3-18のようなになる。ただし、ここでは、特徴をうかだにするため、都道府県の場合と異なる独自の方法を加味しながら、以下のような手順で、細類型から大類型への再類型化を行った。

①まず、類型の過度な細分化を避けるため、超高生産力地域は高生産力地域に組み入れた。
②その関わりで管理中枢地域の条件として人口100万人以上の超大規模地域であることを加えた。
③超大規模地域以外のうち開放性に関して、特殊形態をとる地域をその他の次元・指標のあり方には関係なくベッドタウン地域・求心地域・超流動地域とした。
④そのうえで、その他の地域を生産力（所得）と産業構造に着目して再類型化した。
⑤その結果、低生産力サービス業地域が現時点できわめて多くなる。しかし、サービス業の多様性もあって類型の性質が把握しにくくなっているため、この類型のみ人口規模によってさらに細分化した。具体的には、人口100万人以上を準管理中枢地域、人口30万〜100万人未満を大規模低生産力サービス業地域、人口5万〜30万人未満を中規模低生産力サービス業地域、人口5万人未満を小零細生産力サービス業地域とした。

このうち、小類型の準管理中枢地域と大規模低生産力サービス業地域、中規模低生産力サービス業地域、小零細低生産力サービス業地域は、今回の分析で初めて設定した類型である。従来、これらに該当する地域は、すべて低生産力サービス業地域として一括していた。なぜなら、小類型の種類をできるだけ少なくしようとしましたからである。

もちろん、すでに1980年の段階から低生産力サービス業地域の中に人口100万人以上のところわずかな地域と人口規模の小さな過疎地が同居するようになっていた。ただし、かつては低生産力サービス業地域の数が少なかったので、この点に対する批判も承知の上で、あえて低生産力サービス業地域内の中間をさらに細かく分類することを避けた。それでも、類型の種類が多すぎて特徴を把握しにくいという批判さえあった。

しかし、経済のサービス化の影響もあって、1990年以降、サービス業主導の産業構造をとる低生産力地域が急増していった。そこで、かつて以上に特徴が見えにくくなる可能性を考慮しながら、この類型だけ産業規模と生産力（所得）に、人口規模の次元を加えてさらに細かく再類型化することにしたのである。

その結果、低生産力農業地域から超流動地域まで29の小類型と5つの大類型が設定できる。

こうして把握された地域社会類型（小類型・大類型）の時系列的な推移を見ると（表3-19、表3-20、表3-21も参照）、高度経済成長の底点にあたる1955年には、A. 農山漁村地域が地域数で79.1%、人口で48.8%と圧倒的役割を占めていたことがわかる。しかし他方で、わずかな地域数しかないC. 「工業」地域（3.4%）、B. 複合型産業地域（15.1%）に相対的に人口が集中していたことも事実である（人口構成比＝人口シェア21.3%、21.8%）。したがって、この段階のマクロな地域社会のあり方は、都道府県レベルの場合と比べ、第一にA. 農山漁村地域、C. 「工業」地域以外にB. 複合型産業地域が重要な位置を占めていない点、第二にわずかな地域数しかない類型に多くの人口が集中する傾向が生じている点で大きく異なっていた。それゆえ、市町村レベルでみた場合、この時点ですでに、地域社会の不均等構造は都道府県レベルの如く「都市と農村の対立」という単純な形ではなくまたかたち特徴を示していたといえてよい。

しかし、そうした構造は、高度経済成長以降きわめて複雑な形で再編されていった。それはまず、高度経済成長の底点における主要3類型自体の大きな変化として進展した。
すなわち、圧倒的な地域数を誇っていたA. 農山漁村地域が高度経済成長以降一貫して大幅な減少を続

— 45 —
表3-18 地域社会類別地域数・地域構成比

<table>
<thead>
<tr>
<th>年代</th>
<th>地域数</th>
<th>順位</th>
<th>類別</th>
<th>順位</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1950</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>地域</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>1955</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>地域</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>1960</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>地域</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>1965</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>地域</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>1970</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>地域</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>1975</td>
<td>6</td>
<td>6</td>
<td>地域</td>
<td>6</td>
</tr>
<tr>
<td>1980</td>
<td>7</td>
<td>7</td>
<td>地域</td>
<td>7</td>
</tr>
<tr>
<td>1985</td>
<td>8</td>
<td>8</td>
<td>地域</td>
<td>8</td>
</tr>
<tr>
<td>1990</td>
<td>9</td>
<td>9</td>
<td>地域</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>1995</td>
<td>10</td>
<td>10</td>
<td>地域</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>2000</td>
<td>11</td>
<td>11</td>
<td>地域</td>
<td>11</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）1. 地域社会の単位は2000年の市町村で、それ以前に合併したものは合算。ただし、1970年以前は沖縄の市町村を除く。また、東京都特別区は1地域とする。
2. 地域社会類別の順位は本文を参照。
3. サービス業地域には金融業地域（1970～1985年、各1地域）を含む。
4. 資料：総務省（総務庁）経済産業省国際局、市町村税務研究会編『個人所得指標』（日本マーケティング教育センター発行）
表3-19 地域社会類型別人口構成比・面積構成比

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>A. 農山漁村地域</td>
<td>48.8</td>
<td>38.3</td>
<td>28.4</td>
<td>29.2</td>
<td>12.5</td>
<td>7.8</td>
<td>5.6</td>
</tr>
<tr>
<td>低生産力農業地域</td>
<td>2</td>
<td>38.4</td>
<td>38.4</td>
<td>18.6</td>
<td>12.2</td>
<td>7.5</td>
<td>6.3</td>
</tr>
<tr>
<td>低農産力農業地域</td>
<td>2.8</td>
<td>0.4</td>
<td>0.3</td>
<td>0.4</td>
<td>0.4</td>
<td>0.3</td>
<td>0.3</td>
</tr>
<tr>
<td>低生産力農業地域</td>
<td>2.8</td>
<td>0.4</td>
<td>0.3</td>
<td>0.4</td>
<td>0.4</td>
<td>0.3</td>
<td>0.3</td>
</tr>
<tr>
<td>低生産力農業地域</td>
<td>2.8</td>
<td>0.4</td>
<td>0.3</td>
<td>0.4</td>
<td>0.4</td>
<td>0.3</td>
<td>0.3</td>
</tr>
<tr>
<td>低生産力農業地域</td>
<td>2.8</td>
<td>0.4</td>
<td>0.3</td>
<td>0.4</td>
<td>0.4</td>
<td>0.3</td>
<td>0.3</td>
</tr>
<tr>
<td>低生産力農業地域</td>
<td>2.8</td>
<td>0.4</td>
<td>0.3</td>
<td>0.4</td>
<td>0.4</td>
<td>0.3</td>
<td>0.3</td>
</tr>
<tr>
<td>B. 複合型農業地域</td>
<td>8</td>
<td>21.8</td>
<td>18.6</td>
<td>17.7</td>
<td>15.9</td>
<td>13.9</td>
<td>12.7</td>
</tr>
<tr>
<td>低生産力農業地域</td>
<td>21.8</td>
<td>29.6</td>
<td>36.6</td>
<td>5.8</td>
<td>8.1</td>
<td>12.7</td>
<td>11.0</td>
</tr>
<tr>
<td>低生産力農業地域</td>
<td>2</td>
<td>38.4</td>
<td>38.4</td>
<td>18.6</td>
<td>12.2</td>
<td>7.5</td>
<td>6.3</td>
</tr>
<tr>
<td>低生産力農業地域</td>
<td>2.8</td>
<td>0.4</td>
<td>0.3</td>
<td>0.4</td>
<td>0.4</td>
<td>0.3</td>
<td>0.3</td>
</tr>
<tr>
<td>低生産力農業地域</td>
<td>2.8</td>
<td>0.4</td>
<td>0.3</td>
<td>0.4</td>
<td>0.4</td>
<td>0.3</td>
<td>0.3</td>
</tr>
<tr>
<td>低生産力農業地域</td>
<td>2.8</td>
<td>0.4</td>
<td>0.3</td>
<td>0.4</td>
<td>0.4</td>
<td>0.3</td>
<td>0.3</td>
</tr>
<tr>
<td>低生産力農業地域</td>
<td>2.8</td>
<td>0.4</td>
<td>0.3</td>
<td>0.4</td>
<td>0.4</td>
<td>0.3</td>
<td>0.3</td>
</tr>
</tbody>
</table>

資料: 日本農業総合研究所 地域社会労働研究センター 統計データベース。
<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>A. 岐阜県</td>
<td>1</td>
<td>58.21</td>
<td>57.37</td>
<td>56.25</td>
<td>55.63</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>2</td>
<td>54.44</td>
<td>53.63</td>
<td>52.81</td>
<td>52.31</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>高発生型</td>
<td>3</td>
<td>50.65</td>
<td>50.02</td>
<td>49.60</td>
<td>49.31</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>4</td>
<td>46.87</td>
<td>46.36</td>
<td>46.03</td>
<td>45.72</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>5</td>
<td>43.11</td>
<td>42.60</td>
<td>42.28</td>
<td>42.03</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>6</td>
<td>39.36</td>
<td>39.05</td>
<td>38.83</td>
<td>38.62</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>7</td>
<td>35.61</td>
<td>35.30</td>
<td>35.10</td>
<td>34.90</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>B. 愛知県</td>
<td>8</td>
<td>31.87</td>
<td>31.56</td>
<td>31.26</td>
<td>31.06</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>某県</td>
<td>9</td>
<td>28.11</td>
<td>27.81</td>
<td>27.51</td>
<td>27.31</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>10</td>
<td>24.36</td>
<td>24.06</td>
<td>23.86</td>
<td>23.66</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>11</td>
<td>20.61</td>
<td>20.31</td>
<td>20.11</td>
<td>19.91</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>12</td>
<td>16.86</td>
<td>16.56</td>
<td>16.36</td>
<td>16.16</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>13</td>
<td>13.11</td>
<td>12.81</td>
<td>12.61</td>
<td>12.41</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>C. 「ふるさと」県</td>
<td>14</td>
<td>19.82</td>
<td>19.52</td>
<td>19.22</td>
<td>18.92</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>15</td>
<td>16.07</td>
<td>15.77</td>
<td>15.47</td>
<td>15.17</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>16</td>
<td>12.32</td>
<td>12.02</td>
<td>11.72</td>
<td>11.42</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>17</td>
<td>8.57</td>
<td>8.27</td>
<td>7.97</td>
<td>7.67</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>18</td>
<td>4.82</td>
<td>4.52</td>
<td>4.22</td>
<td>3.92</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>19</td>
<td>1.07</td>
<td>0.77</td>
<td>0.47</td>
<td>0.17</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>20</td>
<td>0.32</td>
<td>0.02</td>
<td>0.01</td>
<td>0.01</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>21</td>
<td>0.07</td>
<td>0.07</td>
<td>0.07</td>
<td>0.07</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>22</td>
<td>0.02</td>
<td>0.02</td>
<td>0.02</td>
<td>0.02</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>D. 不発生型</td>
<td>23</td>
<td>67.34</td>
<td>66.94</td>
<td>66.54</td>
<td>66.14</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>24</td>
<td>63.60</td>
<td>63.20</td>
<td>62.80</td>
<td>62.40</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>25</td>
<td>59.86</td>
<td>59.46</td>
<td>59.06</td>
<td>58.66</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>26</td>
<td>56.12</td>
<td>55.72</td>
<td>55.32</td>
<td>54.92</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>27</td>
<td>52.38</td>
<td>52.08</td>
<td>51.78</td>
<td>51.48</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>28</td>
<td>48.64</td>
<td>48.34</td>
<td>48.04</td>
<td>47.74</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>29</td>
<td>44.90</td>
<td>44.60</td>
<td>44.30</td>
<td>44.00</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>30</td>
<td>41.16</td>
<td>40.86</td>
<td>40.56</td>
<td>40.26</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>31</td>
<td>37.42</td>
<td>37.12</td>
<td>36.82</td>
<td>36.52</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>32</td>
<td>33.68</td>
<td>33.38</td>
<td>33.08</td>
<td>32.78</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>33</td>
<td>30.94</td>
<td>30.64</td>
<td>30.34</td>
<td>30.04</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>34</td>
<td>28.20</td>
<td>27.90</td>
<td>27.60</td>
<td>27.30</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>E. 独立性県</td>
<td>35</td>
<td>25.56</td>
<td>25.26</td>
<td>24.96</td>
<td>24.66</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>36</td>
<td>22.82</td>
<td>22.52</td>
<td>22.22</td>
<td>21.92</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>37</td>
<td>19.08</td>
<td>18.78</td>
<td>18.48</td>
<td>18.18</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>38</td>
<td>16.34</td>
<td>16.04</td>
<td>15.74</td>
<td>15.44</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>39</td>
<td>13.60</td>
<td>13.30</td>
<td>13.00</td>
<td>12.70</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>40</td>
<td>10.86</td>
<td>10.56</td>
<td>10.26</td>
<td>9.96</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>41</td>
<td>8.12</td>
<td>7.82</td>
<td>7.52</td>
<td>7.22</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>低発生型</td>
<td>42</td>
<td>5.38</td>
<td>5.08</td>
<td>4.78</td>
<td>4.48</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

単位：人/平方キロメートル
<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>A. 農山漁村地域</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
<td>12</td>
<td>13</td>
<td>14</td>
<td>15</td>
<td>16</td>
<td>17</td>
<td>18</td>
<td>19</td>
<td>20</td>
<td>21</td>
<td>22</td>
<td>23</td>
</tr>
<tr>
<td>B. 複合型産業地域</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
<td>12</td>
<td>13</td>
<td>14</td>
<td>15</td>
<td>16</td>
<td>17</td>
<td>18</td>
<td>19</td>
<td>20</td>
<td>21</td>
<td>22</td>
<td>23</td>
<td>24</td>
<td>25</td>
<td>26</td>
<td>27</td>
<td>28</td>
<td>29</td>
<td>30</td>
</tr>
<tr>
<td>C. 工業地域</td>
<td>32</td>
<td>33</td>
<td>34</td>
<td>35</td>
<td>36</td>
<td>37</td>
<td>38</td>
<td>39</td>
<td>40</td>
<td>41</td>
<td>42</td>
<td>43</td>
<td>44</td>
<td>45</td>
<td>46</td>
<td>47</td>
<td>48</td>
<td>49</td>
<td>50</td>
<td>51</td>
<td>52</td>
<td>53</td>
<td>54</td>
</tr>
<tr>
<td>D. 不産業の道路地域</td>
<td>57</td>
<td>58</td>
<td>59</td>
<td>60</td>
<td>61</td>
<td>62</td>
<td>63</td>
<td>64</td>
<td>65</td>
<td>66</td>
<td>67</td>
<td>68</td>
<td>69</td>
<td>70</td>
<td>71</td>
<td>72</td>
<td>73</td>
<td>74</td>
<td>75</td>
<td>76</td>
<td>77</td>
<td>78</td>
<td>79</td>
</tr>
<tr>
<td>E. 自然災害地域</td>
<td>83</td>
<td>84</td>
<td>85</td>
<td>86</td>
<td>87</td>
<td>88</td>
<td>89</td>
<td>90</td>
<td>91</td>
<td>92</td>
<td>93</td>
<td>94</td>
<td>95</td>
<td>96</td>
<td>97</td>
<td>98</td>
<td>99</td>
<td>100</td>
<td>101</td>
<td>102</td>
<td>103</td>
<td>104</td>
<td>105</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注：老人人口比率は、各都道府県の65歳以上の人口を推計数～各都道府県の全人口×100
資料：総務省（統計局）『国勢調査報告』、市町村税務研究会監修『個人所得指標～』（日本マーケティング教育センター発行）
け、地勢的に解体傾向の中で、1955年の2,511地域から2000年には322地域へと78.1％も減少した。しかも、かつて日本全体の48.8％を抱えていた人口も、今や1.6％を数えるのみになっている。ただし、A. 農山漁村地域のほとんどを構成する低生産力農業地域は、A. 農山漁村地域が解体した都道府県とは異なって、2000年現在に至っても地域数が全市町村の9.8％、面積でも国土全体の8.9％を維持している。ちなみに、低生産力農業地域人口密度が1平均キロメートルあたり55.98人（全国値=341.41人）ときわめて高く、老人人口比率が27.9％（全国値=17.3％）ときわめて高齢化の進む過疎地としての性格をもっている。

これに対し、C.「工業」地域は全体として着実に増加、なかでも低生産力工業地域は1990年時点で7.2％（555地域）と低生産力農業地域を上回り、人口で15.6％と低生産力農業地域の約5倍に達した。しかし、それ以後減少傾向に転じ、2000年現在、地域数が12.6％（407地域）、人口が10.4％に低下している。

一方、高生産力工業地域は、1970年におわずか5.1％（164地域）の地域数でありながら人口が35.7％と全類型中最高の数値に達した。この点で、特徴的な姿を示していた。しかし、それ以降、経済のサービス化にともなって低生産力工業地域に先んじて人口が減少に転じ、現在7.3％にまで低下している。ちなみに、地域数も2.7％（87地域）に減少している。

さらに、B. 複合型産業地域の動きを見ると、1980年まで、とりわけ経済的基盤の脆弱な産業基盤停滞地域（小類型）の増加が著しい。この類型は1955年から1980年まで一貫して増加した。しかし、1985年に横ばいの後、減少に転じた。それでも1995年までは834地域（25.8％）もっとも地域数が多く、もっとも面積の多い類型（国土面積の27.8％）であった。だが、それ以後も減少傾向に歯止めがかからず、2000年には584地域（18.1％）に低下し、地域数、面積ともに一位の座を転落することになった。この小類型の場合、低生産力農業地域と同様、人口密度が低く（1平均キロメートルあたり80.23人）、老人人口比率が高くなっている（25.0％）。その意味で、これらの類型は低生産力農業地域とともに高度経済成長の繁栄の陰の部分を代表する、高齢化が進む過疎地の典型であるといえる。

こうして、高度経済成長の基点における主要3類型は、高度経済成長以降の成長期を経て大きく変化したのである。

そのうえ、高度経済成長以降の変化は、かつての主要3類型以外の類型が次第に重要な位置を占めるようになるという形においても進展している。

第一に、産業基盤停滞地域とともに経済的基盤の脆弱な地域として性格づけられる小類型、小零細低生産力サービス業地域が、1980年以降それぞれを上回るスピードで地域数を増加させ、とくに1990年から1995年にかけて一気に271地域、さらに1995年から2000年かけて244地域、増加している。その結果、2000年現在、845地域と全地域の26.2％を占め、小類型のうち最も多く類型となった。面積も日本全土の35.6％を占め、各小類型中最大の面積となっている。それだけ、1990年以降の増加が著しいということである。

ただし、人口の構成比は7.9％と必ずしも高くなく、人口密度も低い（1平均キロメートルあたり75.73人）。

この類型はリゾート開発や観光産業にかかわる産業基盤を見いだせぬ数多くの地域によって構成されている、新しい過疎地のあり方に示す類型であるとみなすことができる。

第二に、都道府県レベルではみられなかったE. 自立性喪失地域が1955年の17地域・1.4％から2000年には693地域・21.5％、人口で0.8％から19.8％へと大幅な増加をみせている。小類型で見ると、その多く（409地域）がベッドタウン地域で、ここに全人口の12.3％が集中している。このベッドタウン地域への人口集中は、すでにA. 農山漁村地域全体、B. 複合型産業地域全体を大きく上回り、C.「工業」地域全体と肩を並べる水準に達している。この点に、市町村の枠をこえた新たな“生活圏”の問題が生ずる一つの現実的基盤が示されている。ベッドタウン地域は人口密度（1平均キロメートルあたり881.50人）が高く、高齢化水準（14.8％）の相対的に低い地域としての性格をもっている。

第三に、かつて存在しなかった管理中枢地域の登場とそこへの極端な人口集中傾向に注目する必要がある。つまり、この類型は1970年に初めて登場し（札幌）、1985年に9地域（札幌、東京特別区、横浜、名古屋、京都、大阪、神戸、広島、福岡）まで増加した。その後、1990年に札幌と福岡、さらに1995年に京
都、大阪、神戸が生産力（所得）水準を低下させ管理中核地域からはずれ、逆に川崎がこの類型に入った。2000年には神戸が管理中核地域として復活し、仙台が新たに加わった。その結果、現在管理中核地域は仙台、東京特別区、横浜、川崎、名古屋、神戸、広島の7つだけになっている。しかし、このほんのわずか7地域全て全国の人口の14.7％が居住するようになり、各小類型中、もっとも多くの人口を抱えるに至っている。そのため、すべての類型の中でもっとも人口密度が高くなっている（1平方キロメートルあたり5,165.81人）。

第四に、かつて管理中核地域であったにもかかわらず、その後その地位を変化させた地域（札幌、京都、大阪、福岡）は、すべて準管理中核地域に移行している。これは、引き続き不況と東京一極集中によって、かつての管理中核地域の再編が進んでいることを示している。準管理中核地域は1980年からこの類型に属していた北九州とあわせて、1990年に3地域、1995年で6地域となり、2000年には、神戸が管理中核地域として復活したため、5地域になった。

このように、かつて地域数・人口いずれかからもわずかしかなかった類型の中に、現在では重要な位置を占めるものが生じている。しかも、その場合特徴的なことは、これらの類型は第一に価値生産部門が主導する産業構造を自立した形でとりえない地域であること、第二に小規模低生産力サービス業地域を除いて、地域数以上、人口の点で重要な位置を占めるようになっていること、第三にこれらは経済的基盤の脆弱な地域と管理・行政的な地域およびその周辺地域という異なる性格をもつ地域であること、第四に近年、かつて管理中核地域であったいくつかの超大規模都市が生産力（所得）水準の低下によって経済的基盤の脆弱な地域へ移行していることである。その意味で、高度経済成長以降多くの人口が4つの性格の異なった動きを内包しながら、価値生産部門以外の産業構造を特徴とした地域へ集中していたとみてよい。

こうして、高度経済成長以降の市町村レベルにおける地域社会類型の変動は、地域数と人口の極端なアングラランスを介しながら、小類型でできた場合、底辺か過済的な産業基盤停滞地域、低生産力農業地域と新たな過済地域を多く含む小規模低生産力サービス業地域が広がり、7地域の管理中核地域が頂点に君臨、その間に多様な地域が存在する新しい不均等構造の形成に向かって展開されてきたことが明らかとなる。また、近年では全国の頂点に立つ管理中核地域自体の再編も進んでいる。その意味で、市町村レベルにおける地域社会の不均等構造は都道府県レベルと比べものにならぬほど、複雑で多様な構造をもつものへ再編されてきているといわんばかりならない。

しかし、多様な類型のうち、地域数や人口の点で重要な位置を占める類型は限られていることも事実である。実際、地域数や人口のいずれかで10％以上の構成比を占める類型に限ると、産業基盤停滞地域（地域数）、小規模低生産力サービス業地域（地域数）が中小規模低生産力サービス業地域（地域数）、ベッドタウン地域（地域数・人口）、管理中核地域（人口）の5類型のみになる（ちなみに、2000年現在、23の小類型が現存している）。しかも、この5類型だけで、地域数で69.7％、人口で49.8％、面積で70.7％のシェアを占めている。その意味で、この5類型が現段階における主要類型になっているとみてよい。したがって、これらの主要類型が現段階における地域社会の複雑で多様な不均等構造の骨格を作っていることが明らかになる。

その場合、特徴的なことは、産業基盤停滞地域、小規模低生産力サービス業地域が過済的な地域、ベッドタウン地域、管理中核地域が過密地域としての性格をもち、低生産力農業地域が人口密度の点で中間的な位置を占めているということである。現段階における主要な地域社会類型は、2つの過済的な類型、2つの過密的な類型とその中間に位置する1つの類型から構成されているのである。

事実、これらの5類型とかつて主要類型であった低生産力農業地域と高生産力工業地域に属する市町村の人口推移を1920年から2000年までの80年間の国勢調査にもとづいて見てみると、表3-22のごとく、人口最多県、人口最少県が過密的な類型と過密的な類型で大きく異なっている。過密的な性格をもつ産業基盤停滞地域と小規模低生産力サービス業地域は、ともに1955年と1950年に人口が最大の地域が多く、過半数の地域で2000年が人口最小になっている。それは、かつて主要な地域類型であった低生産力農業地域でも
同様である。これからも、これらの類型が過疎地域の典型であることが示されている。
一方、過密的な性格をもつベッドタウン地域、管理中枢地域は、人口最大年・最小年に関してほとんど同じ傾向を示している。つまり、いずれも人口最大が2000年の地域がもっとも多い。こうした地域がベッドタウン地域では66.0％、管理中枢地域では85.7％になっている。かつて主要な類型であった高生産力工業地域もまったく同様な傾向を示している（2000年、69.0％）。それだけ、これらの類型では、近年の人口増加が著しいことを物語っている。逆に、人口最小年はデータのもっとも古い1920年の地域が3類型とも最多で、ときに管理中枢地域と高生産力工業地域は、85.7％、83.9％の地域がこれに属している。ここから、これらの類型をとる地域の場合、ほぼ一貫した人口増加傾向が読みとれる。
これに対し、中間的な性格をもつ低生産力工業地域では、過密的な類型と同様、2000年に人口が最大の地域がもっとも多い。しかし、その割合は、28.0％で過密的な類型とは比べものにならないくらい少ない。人口最小年も過密的な類型と同じく1920年の地域がもっとも多い（57.0％）。ただ、割合（17.9％）は少ないものの、第二位に2000年に人口が最小の地域が位置づけている。この点でも過密的な類型と過疎的な類型の中間的な性格が見いだされる。
こうして、人口最大年・最小年のあり方から見ても過疎的な性格をもつ類型、過密的な性格をもつ類型、中間的な性格の類型の違いが明確に現れている。
しかも、これらの類型は、生産力（所得）水準も明らかに異なっている。全国の人口一人当たり課税対象所得を100とした場合、過密的な地域であるベッドタウン地域、管理中枢地域、高生産力工業地域は、表3-23の知く、いずれも全国平均をこえている。とくに管理中枢地域は127.3と飛び抜けて高い水準を示している。これに対し、過疎的な地域を多く含む産業基盤停滞地域、小零細低生産力サービス業地域、低生産力農業地域は71.8、75.0、62.2と生産力（所得）水準が格段に低く、中間的な類型である低生産力工業地域が88.9と過密的な地域と過疎的な地域の中間となっています。類型間の格差は明確である。そのうえ、各類型を構成する地域は年によって異なるものの、こうした類型間の格差は1955年以来ほぼ同様な形で存在し続けており、この点で、きわめて根強い性格をもっている。
ここから、現段階における地域社会の複雑で多様な不均等構造の背後に、過密・過疎を兼ね備えた地域の不均等の構造が存在することが明らかになる。その意味で、現段階の地域社会のマクロな全体構造は、地域社会類型の多様性の中に貫徹する過密・過疎とそれを軸にした根強い地域の不均等構造の問題を基本にして把握される必要があるといえる。

第3項 地域社会類型の変動パターン
ところが、ここまでの特徴は地域社会類型の全体的な構成変化（地域数・人口等）から浮かび上がるもののとどまる。その主要類型がどのような類型に変化しながら、地域社会類型の新しい全体構造ができてきたのかは、必ずしも明らかにならない。そこで、この点を高水経済成長の基点である1955年、ほぼ低成長初期の基点となる1975年及び2000年現在の3時点での主要類型（小類型）の変動パターンから大まかに見えてみると、表3-24のようなになる。
表3-23 地域社会経済像をもとに所得水準・所得シェア

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>所得水準（平均）</td>
<td>62.2</td>
<td>61.5</td>
<td>60.2</td>
<td>59.3</td>
<td>59.8</td>
<td>60.6</td>
<td>62.1</td>
</tr>
<tr>
<td>所得シェア（全国平均を100とする）</td>
<td>100.0</td>
<td>100.0</td>
<td>100.0</td>
<td>100.0</td>
<td>100.0</td>
<td>100.0</td>
<td>100.0</td>
</tr>
</tbody>
</table>

表3-24 主要類型（1955年）の変動パターン

<table>
<thead>
<tr>
<th>年度</th>
<th>1955年</th>
<th>1960年</th>
<th>1965年</th>
<th>1970年</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>類型</td>
<td>変動分類</td>
<td>累積度数</td>
<td>パターン</td>
<td>数</td>
</tr>
<tr>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>12.6</td>
<td>6.7</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>15.9</td>
<td>11.6</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>6.7</td>
<td>8.7</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>1</td>
<td>8.7</td>
<td>8.7</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>1</td>
<td>6.7</td>
<td>6.7</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

図3-1 主要類型（1955年）の変動パターン（2段階分類移動）

ここから、1955年の農業地域と工業地域はそれぞれ上位4位、上位5位の変動パターンだけが50%を超え、複合型産業地域も上位5位の変動パターンで41.6%に達していることがわかる。主要類型はどれもごく限られたパターンを通じて変動してきたということがある。

この点をふまえ、さらに、各類型の上位5位の変動パターンをまとめて図式化すると図3-1のようなになる。

この図から、第一に、1955年から1975年にかけて農業地域と工業地域がまったく異なる変動パターンを示していることがわかる。農業地域は低生産力農業地域として自らの地位を維持するか産業基盤停滞地域へ移行し、工業地域はその内部に生産力の異なる類型を含みながら工業地域としての立場を確保・継続していた。いえども、それからは、高度経済成長期においては、農業地域の解体は工業地域への移行につながり、もっぱら産業基盤停滞地域へ移行する形をとったということである。

第二に、同じ時期、複合型産業地域は生産力の低い複合型の産業構造をもと産業基盤停滞地域として自らの地位を保持するか、低生産力工業地域、高生産力工業地域およびベッドタウン地域のいずれかへ移行するパターンをとった。その場合、重要なことはこれらのパターンの違いは1955年時点での産業基盤の実質の違いによってもたらされていることである。つまり、前後（産業基盤停滞地域として自らの地位を保持）には1955年時点での農業業複合型の地域が4割以上含まれるのに対し、後者は（工業地域やベッドタウン地域へ移行）にはそうした地域はほとんどなく、同様に「農業」複合型の地域しか存在しなかった。

したがって、第三に、高度経済成長期においては大別して、①農業地域とそれ自体農村的な色彩の強い農林業複合型の地域が低生産力農業地域・産業基盤停滞地域に移行するパターンと、②工業地域および「農工」複合型の地域が低生産力工業地域・高生産力工業地域あるいはベッドタウン地域へ移行するパターンが存在していたことが明らかになる。それは、農村的な性格の強いグループが農村的な非工業的な地域に移動し、工業的ないし工業化しつつある性格をもつグループが工業的な地域あるいは都市周辺のベッドタウンへ移行する形であった。
ドタウン地域に移動したといえかかることができる。その意味で、単純な形で「都市と農村の対立」として把握することのできない姿を示していた地域社会類型の全体像の背後に、その移動パターンから見た場合、農村的な地域グループと都市的な地域グループの相違が顕著と存在していたことが明らかになる。

しかし、第四に、1975年から2000年にかけて多様な地域への分解が進み、農村的なグループと都市的なグループの二大構成は大きく崩れるようになった。1975年時点で農村的なグループに属する低生産力農業地域は低生産力農業地域、産業基盤滞在地域、小零細生産力サービス業地域、産業基盤滞在地域、産業基盤滞在地域、低生産力工業地域へ移し、都市的なグループに属する低生産力工業地域は低生産力工業地域とベッドタウン地域、高生産力工業地域は低生産力工業地域、高生産力工業地域、超流動地域へ分解され、ベッドタウン地域は同じ調整を維持するというパターンをとっている。

ただし、第五に、1975年から2000年にかけての変化はまったく制約なしに進んだわけではないことに注意する必要がある。それは、農村的なグループ、都市的なグループ双方から低生産力工業地域へ移行する共通のパターンが存在すると同時に、1975年時点で農村的なグループに属していた地域だけが低生産力農業地域、産業基盤滞在地域、小零細生産力サービス業地域の3タイプに移行するパターンと、逆に1975年時点で高生産力工業地域となっていた都市的なグループに属する地域だけが高生産力工業地域へ超流動地域へ移行しうるパターンが存在していることに示されている。また、1975年時点で同じ都市的なグループに属していたベッドタウン地域だけが2000年でもベッドタウン地域としての地位を維持している。いいかえれば、1975年時点で農村的なグループに属していた地域は未だかつて高生産力工業地域や超流動地域であるヘッドタウン地域に移行したが、都市的なグループに属していた地域は低生産力農業地域、産業基盤滞在地域、小零細生産力サービス業地域に移行したというということである。その意味で、農村的なグループと都市的なグループの共通の調整パターンがあるものの、両者の間にはまったく異なる移動パターンも存在しているのである。

こうして、地域社会類型は自由な類型変動を阻む厳然たる移動障壁を背後にもちながら、高度経済成長期を低成長期の2つの段階で異なった変動パターンをとってきたと考えられる。高度経済成長期には農村グループと都市グループの間にまったく異なる変動パターンが存在し、低成長期にも共通の変動パターンが生まれるとともに両者の間で交わることのない独自の変動パターンが存在し続けているのである。それは、いわば二段階分節移動をともども呼びうるような変動パターンというともよい。ここに、主要な類型が高度経済成長期までを通じてきわめて多様な類型を全体として変化したが、それはそれぞれの類型が別の類型へ自由に移動した結果生み出されたものではないことが明らかになる。

第4項 地域社会類型の地域配置

それでは、こうした形で変動してきた地域社会類型の地域配置はどのように変化してきたのであろうか。次に、この点について見てみよう。

表3-25、表3-26、表3-27は1955年、1975年、2000年の主要な類型（小類型）の都道府県別配置を示したものである（図3-2、図3-3、図3-4および前掲、表3-19も参照）。

ここから、1955年には農業地域が国土面積全体の76.0％にのぼり、東北から千葉、栃木、群馬、新潟、長野に至る北日本と京都、兵庫から瀬戸内海沿岸を除く中国、九州にかけての南日本にそれぞれ大きな農業地帯が形成されていたことが明らかになる。わずかな残された地域もほとんどの複合地域（面積構成比16.9％）に限られ、工業地域（同、1.9％）はまだに点的な存在でしかなかった。

1975年になると、低生産力農業地域が国土の42.0％まで減少、北日本の農業地帯は東北に限定され、南日本の農業地域も近畿諸府県が欠けるようになった。これにともなって、北関東と北陸や中部、近畿にかけての地域に産業基盤滞在地域の面的広がりが形成されつつある（同、29.7％）。だが、これ以外の類型はいずれも国土の10％に達せず、点的な存在にとどまっていた。

— 54 —
これが、2000年に至ると決定的な変化を遂げる。  
第一に、かつて圧倒的な広さを誇った低生産力農業地域の面積は8.9％まで激減し、農業地域というべき面的広がりはほぼ消滅した。また、産業基盤停滞域も減少し、国土の19.2％を占める程度になった。それゆえに、かつての農業地域や産業基盤停滞域では小零細生産力サービス業地域が主流を占めるようになった。現在、小零細生産力サービス業地域は国土の実に36.5％を占めるまでになっている。  
第二に、それは過疎地の姿が大きく様変わりしていることを物語っている。高度成長期から1990年まで  
は低生産力農業地域と産業基盤停滞域が過疎地の典型であった。しかし、1990年以降それらの類型は確  
実に減少し、新たに急増した小零細生産力サービス業地域が過疎地の典型として入れ替わった。  
第三に、だが、現在はまだ過疎地の構造変化の途上にあると考えた方が現実的である。逆にいえば、現  
時点では新たな過疎地とかつての過疎地が共存しながら、多様な形で過疎地が構成されていると見なす  
必要がある。こうした観点から、かつての過疎地であった低生産力農業地域、産業基盤停滞域と新たな過  
疎地の典型となった小零細生産力サービス業地域を組み合わせてみると、今日の過疎的な類型全体は、  
国土の実に63.7％に達する。  
第四に、都道府県の場合、帯状の一大地域を形成していた低生産力工業地域は、国土面積の10.4％しか  
存在せず、一部の地域で面的ひろがりを示すのみとなっている。しかも、関東内陸部、長野、岐阜、  
滋賀、三重の一部、兵庫から中・四国の瀬戸内臨海部という三大都市圏の周辺部に限られたものとなって  
いる。  
第五に、とくに人口集中の著しい管理中枢地域と高生産力工業地域が、太平洋-ペルト地帯のうち首都圏  
と中京圏を結ぶ地域に集中・特化する形で存在するようになっている。つまり、管理中枢地域は仙台、広  
島を除き、東京都特別区・横浜・川崎、名古屋、神戸という首都圏、中京圏、近畿圏に位置する地域である。  
しかも、高生産力工業地域は首都圏（埼玉・千葉・東京・神奈川）、中京圏（愛知・三重・岐阜）と静岡  
全体の81.6％（71地域）が集中している。これで特徴的なことは、近畿圏において1990年まで管理中枢  
地域としての地位を占めていた大阪と京都が生産力（所得）の低下によってその地位を失ったことであり、  
近畿圏にあった高生産力工業地域が2地域を残して存在しなくなったことである。それにより、近畿圏の経済的  
地盤沈下や東京一極集中を反映したものであるといえる。  
第六に、もう一つの過疎地域を代表するベッドタウン地域がいくつ都市圏を中心として、それ以外の  
地域にも少ないまんべんのない形で存在するようになっている。たしかに、一方で、ベッドタウン地域  
全体のうち43.8％が三大都市圏に集中している。これは、管理中枢地域と高生産力工業地域がその周辺  
ベッドタウン地域を広く抱えていることを示している。だが、他方で、ベッドタウン地域が存在しない都  
道府県はほとんどなく、北海道と大分を除く各都府県に必ず存在している。いずれの地域も交通網の発達  
によって県庁所在地を中心に通勤圏が拡大していることを物語っている。こうして、三大都市圏への集中  
と全国各地での出現という点にベッドタウン地域の地域分布の特徴が見いだせる。  
その結果、現在およびかつての過疎地域を代表する管理中枢機能、高生産力工業地域、ベッドタウン地  
域の三類型は、あわせて国土のわずか7.9％を占めるにすぎない。しかし、まさにそこに、全人口の34.0  
％が居住するようになっており、きわめて偏った姿をうかびにしている。  
このように、現在では、多くのベッドタウン地域を抱える管理中枢地域・高生産力工業地域が首都圏と  
中京圏を結ぶ地域に集中・特化し、ベッドタウン地域がその周辺を含めた三大都市圏に数多く存在してい  
る。そして、三大都市圏周辺に限定された形で低生産力工業地域が面的広がりをもって構成され、小零細  
生産力サービス業地域や産業基盤停滞地域・低生産力農業地域が三大都市圏以外の地域に大きく広がる  
という配置構造が形成されている。しかも、各類型の面的ひろがりの大きさに反比例して人口が配置され  
るという事態が進展しているのである。それは、いわば面的広がりから見た“ビラミッド構造”と人口配  
置から見た“逆ビラミッド構造”が組み合わさった二重に歪んだ“対称型ピラミッド構造”の形成を意味  
している。それゆえ、こうした偏った地域社会類型の配置構造それぞれが地域社会の不均等構造の特質を  
示すものに他ならないといえよう。
表3-25 主要類型の都道府県別配置（1955年）

<table>
<thead>
<tr>
<th>県都</th>
<th>輸業</th>
<th>輸出</th>
<th>工業</th>
<th>産業</th>
<th>蛋業</th>
<th>関業</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>139</td>
<td>38</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>青森</td>
<td>57</td>
<td>4</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>岩手</td>
<td>52</td>
<td>6</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>宮城</td>
<td>62</td>
<td>6</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>秋田</td>
<td>66</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>山形</td>
<td>42</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>福島</td>
<td>87</td>
<td>3</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>茨城</td>
<td>80</td>
<td>4</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>栃木</td>
<td>41</td>
<td>4</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>群馬</td>
<td>58</td>
<td>6</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>埼玉</td>
<td>73</td>
<td>14</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>千葉</td>
<td>72</td>
<td>6</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>東京都</td>
<td>16</td>
<td>8</td>
<td>4</td>
<td>6</td>
<td>5</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>神奈川</td>
<td>16</td>
<td>10</td>
<td>2</td>
<td>6</td>
<td>2</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>新潟</td>
<td>100</td>
<td>10</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>富山</td>
<td>29</td>
<td>6</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>石川</td>
<td>25</td>
<td>13</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>福井</td>
<td>19</td>
<td>16</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>山梨</td>
<td>54</td>
<td>5</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>長野</td>
<td>108</td>
<td>18</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>岐阜</td>
<td>69</td>
<td>23</td>
<td>5</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>静岡</td>
<td>40</td>
<td>26</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>愛知</td>
<td>49</td>
<td>29</td>
<td>9</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>三重</td>
<td>43</td>
<td>18</td>
<td>4</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>静岡</td>
<td>45</td>
<td>5</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>京都市</td>
<td>32</td>
<td>10</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>大阪</td>
<td>11</td>
<td>17</td>
<td>10</td>
<td>5</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>兵庫</td>
<td>59</td>
<td>17</td>
<td>6</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>奈良</td>
<td>27</td>
<td>15</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>和歌山</td>
<td>36</td>
<td>13</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>鳥取</td>
<td>37</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>島根</td>
<td>56</td>
<td>3</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>岡山</td>
<td>69</td>
<td>8</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>広島</td>
<td>68</td>
<td>13</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>山口</td>
<td>43</td>
<td>11</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>徳島</td>
<td>39</td>
<td>9</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>香川</td>
<td>28</td>
<td>13</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>愛媛</td>
<td>56</td>
<td>14</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>高知</td>
<td>42</td>
<td>9</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>福岡</td>
<td>58</td>
<td>17</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>佐賀</td>
<td>40</td>
<td>6</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>長崎</td>
<td>56</td>
<td>13</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>熊本</td>
<td>87</td>
<td>6</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>大分</td>
<td>52</td>
<td>5</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>宮崎</td>
<td>41</td>
<td>3</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>鹿児島</td>
<td>94</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>冲縄</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
</tbody>
</table>

合計 | 2475 | 478 | 69 | 30 | 15 | |

補助比 | 18.9 | 34.9 | 66.7 | 53.3 | 93.3 | |

注) 1. 単位は市町村、％。
2. '三都比'とは三大都市圏比のこと。
3. 三大都市圏比＝京都市（埼玉、千葉、東京、神奈川）、近畿圏（京都、大阪、兵庫、奈良）、
中京圏（愛知、三重、岐阜）の市町村の当該類型の市町村比を示す。
4. 全国市町村に占める三大都市圏の市町村の割合は22.6％。

表3-26 主要類型の都道府県別配置（1975年） 単位：市町村、％

<table>
<thead>
<tr>
<th>県都</th>
<th>副都</th>
<th>産業</th>
<th>副産</th>
<th>高工</th>
<th>産業</th>
<th>関業</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>83</td>
<td>64</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>15</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>青森</td>
<td>49</td>
<td>9</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>岩手</td>
<td>41</td>
<td>12</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>宮城</td>
<td>43</td>
<td>15</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>秋田</td>
<td>51</td>
<td>14</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>山形</td>
<td>29</td>
<td>11</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>福島</td>
<td>56</td>
<td>29</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>茨城</td>
<td>45</td>
<td>27</td>
<td>5</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>栃木</td>
<td>14</td>
<td>22</td>
<td>8</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>群馬</td>
<td>34</td>
<td>21</td>
<td>7</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>埼玉</td>
<td>11</td>
<td>31</td>
<td>8</td>
<td>13</td>
<td>2</td>
<td>20</td>
</tr>
<tr>
<td>千葉</td>
<td>46</td>
<td>9</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>13</td>
</tr>
<tr>
<td>東京</td>
<td>1</td>
<td>8</td>
<td>1</td>
<td>6</td>
<td>16</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>神奈川</td>
<td>1</td>
<td>19</td>
<td>3</td>
<td>7</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>新潟</td>
<td>60</td>
<td>32</td>
<td>11</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>富山</td>
<td>5</td>
<td>18</td>
<td>4</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>石川</td>
<td>6</td>
<td>12</td>
<td>12</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>福井</td>
<td>5</td>
<td>17</td>
<td>7</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>山梨</td>
<td>23</td>
<td>23</td>
<td>9</td>
<td>6</td>
<td>1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>長野</td>
<td>58</td>
<td>40</td>
<td>7</td>
<td>3</td>
<td>8</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>岐阜</td>
<td>14</td>
<td>49</td>
<td>21</td>
<td>10</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>静岡</td>
<td>6</td>
<td>27</td>
<td>6</td>
<td>18</td>
<td>9</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>愛知</td>
<td>19</td>
<td>11</td>
<td>30</td>
<td>1</td>
<td>11</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>三重</td>
<td>13</td>
<td>11</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>滋賀</td>
<td>7</td>
<td>27</td>
<td>5</td>
<td>9</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>京都</td>
<td>8</td>
<td>13</td>
<td>8</td>
<td>3</td>
<td></td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>大阪</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>9</td>
<td>9</td>
<td>1</td>
<td>20</td>
</tr>
<tr>
<td>兵庫</td>
<td>12</td>
<td>35</td>
<td>15</td>
<td>10</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>奈良</td>
<td>7</td>
<td>12</td>
<td>9</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>和歌山</td>
<td>16</td>
<td>19</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>鳥取</td>
<td>25</td>
<td>8</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>島根</td>
<td>36</td>
<td>15</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td>2</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>岡山</td>
<td>35</td>
<td>29</td>
<td>5</td>
<td>3</td>
<td>2</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>広島</td>
<td>33</td>
<td>27</td>
<td>5</td>
<td>10</td>
<td>3</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>山口</td>
<td>32</td>
<td>6</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>徳島</td>
<td>20</td>
<td>24</td>
<td>3</td>
<td></td>
<td>1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>香川</td>
<td>13</td>
<td>11</td>
<td>10</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>愛媛</td>
<td>32</td>
<td>24</td>
<td>5</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>高知</td>
<td>31</td>
<td>16</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>福岡</td>
<td>29</td>
<td>33</td>
<td>9</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>16</td>
</tr>
<tr>
<td>佐賀</td>
<td>26</td>
<td>15</td>
<td>4</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>長崎</td>
<td>36</td>
<td>16</td>
<td>4</td>
<td>3</td>
<td>2</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>熊本</td>
<td>73</td>
<td>12</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>大分</td>
<td>44</td>
<td>6</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>宮崎</td>
<td>33</td>
<td>6</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>鹿児島</td>
<td>65</td>
<td>22</td>
<td>7</td>
<td></td>
<td></td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>沖縄</td>
<td>21</td>
<td>10</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td>6</td>
<td>3</td>
</tr>
</tbody>
</table>

合計 | 1337 | 921 | 237 | 171 | 6 | 104 | 149 | |

補助比 | 9.1 | 21.9 | 36.3 | 64.3 | 66.7 | 23.1 | 74.5 | |

注) 全国市町村に占める三大都市圏の市町村の割合は22.6％。
表3-27 主要農業の都道府県別配置（2000年） 単位:市町村、％

<table>
<thead>
<tr>
<th>原産地</th>
<th>低農</th>
<th>低畜</th>
<th>低工</th>
<th>高工</th>
<th>高中</th>
<th>小低農</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>43</td>
<td>26</td>
<td>3</td>
<td></td>
<td></td>
<td>98</td>
</tr>
<tr>
<td>青森</td>
<td>19</td>
<td>23</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>15</td>
</tr>
<tr>
<td>宮城</td>
<td>6</td>
<td>25</td>
<td>4</td>
<td></td>
<td></td>
<td>17</td>
</tr>
<tr>
<td>茨城</td>
<td>21</td>
<td>8</td>
<td>1</td>
<td>14</td>
<td>12</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>秋田</td>
<td>31</td>
<td>7</td>
<td></td>
<td>23</td>
<td>2</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>山形</td>
<td>25</td>
<td>7</td>
<td></td>
<td>6</td>
<td>2</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>岩手</td>
<td>6</td>
<td>35</td>
<td>19</td>
<td>12</td>
<td>7</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>茨城</td>
<td>4</td>
<td>21</td>
<td>20</td>
<td>3</td>
<td>5</td>
<td>14</td>
</tr>
<tr>
<td>茨城</td>
<td>13</td>
<td>19</td>
<td>1</td>
<td>9</td>
<td>2</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>高知</td>
<td>1</td>
<td>13</td>
<td>18</td>
<td>15</td>
<td>8</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>福岡</td>
<td>4</td>
<td>18</td>
<td>6</td>
<td>1</td>
<td>36</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>千葉</td>
<td>5</td>
<td>8</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>15</td>
<td>24</td>
</tr>
<tr>
<td>東京</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>6</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>神奈川</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>6</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>新潟</td>
<td>3</td>
<td>29</td>
<td>25</td>
<td>30</td>
<td>11</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>富山</td>
<td>14</td>
<td>3</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td>7</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>岩手</td>
<td>3</td>
<td>8</td>
<td>1</td>
<td>12</td>
<td>8</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>福井</td>
<td>3</td>
<td>10</td>
<td></td>
<td>9</td>
<td>7</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>山梨</td>
<td>6</td>
<td>12</td>
<td>11</td>
<td>15</td>
<td>6</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>長野</td>
<td>11</td>
<td>26</td>
<td>25</td>
<td>35</td>
<td>13</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>岐阜</td>
<td>1</td>
<td>12</td>
<td>30</td>
<td>4</td>
<td>21</td>
<td>12</td>
</tr>
<tr>
<td>静岡</td>
<td>5</td>
<td>8</td>
<td>21</td>
<td>17</td>
<td>8</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>愛知</td>
<td>3</td>
<td>2</td>
<td>5</td>
<td>23</td>
<td>1</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>三重</td>
<td>1</td>
<td>5</td>
<td>9</td>
<td>7</td>
<td>16</td>
<td>15</td>
</tr>
<tr>
<td>滋賀</td>
<td>2</td>
<td>16</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>10</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>京都</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>8</td>
<td>12</td>
<td>10</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>大阪</td>
<td>4</td>
<td>8</td>
<td>1</td>
<td>12</td>
<td>9</td>
<td>17</td>
</tr>
<tr>
<td>兵庫</td>
<td>1</td>
<td>14</td>
<td>23</td>
<td>1</td>
<td>24</td>
<td>12</td>
</tr>
<tr>
<td>奈良</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>4</td>
<td></td>
<td>12</td>
<td>15</td>
</tr>
<tr>
<td>和歌山</td>
<td>8</td>
<td>6</td>
<td>3</td>
<td>23</td>
<td>5</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>鳥取</td>
<td>7</td>
<td>13</td>
<td>2</td>
<td>5</td>
<td>9</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>島根</td>
<td>2</td>
<td>11</td>
<td>5</td>
<td>34</td>
<td>3</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>岡山</td>
<td>5</td>
<td>24</td>
<td>14</td>
<td>19</td>
<td>8</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>広島</td>
<td>18</td>
<td>15</td>
<td>9</td>
<td>1</td>
<td>26</td>
<td>6</td>
</tr>
<tr>
<td>山口</td>
<td>8</td>
<td>5</td>
<td>7</td>
<td></td>
<td>22</td>
<td>6</td>
</tr>
<tr>
<td>徳島</td>
<td>4</td>
<td>12</td>
<td>3</td>
<td>20</td>
<td>4</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>香川</td>
<td>6</td>
<td>11</td>
<td>1</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>愛媛</td>
<td>12</td>
<td>20</td>
<td>8</td>
<td></td>
<td>17</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>高知</td>
<td>9</td>
<td>13</td>
<td></td>
<td>25</td>
<td>3</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>福岡</td>
<td>8</td>
<td>6</td>
<td>6</td>
<td>16</td>
<td>31</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>佐賀</td>
<td>7</td>
<td>5</td>
<td>4</td>
<td>13</td>
<td>5</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>長崎</td>
<td>8</td>
<td>14</td>
<td>2</td>
<td>38</td>
<td>3</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>鹿児島</td>
<td>22</td>
<td>15</td>
<td>3</td>
<td>37</td>
<td>4</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>大分</td>
<td>15</td>
<td>15</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td>17</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>宮崎</td>
<td>9</td>
<td>16</td>
<td>2</td>
<td>11</td>
<td>2</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>鹿児島</td>
<td>21</td>
<td>21</td>
<td>2</td>
<td>44</td>
<td>3</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>沖縄</td>
<td>9</td>
<td>3</td>
<td></td>
<td></td>
<td>15</td>
<td>7</td>
</tr>
</tbody>
</table>

合計 286 584 407 87 7 845 408

合計 4.9 8.7 25.1 59.8 71.4 13.8 43.8

注) 全国市町村に占める三大都市圏の市町村の割合は22.5%。

— 57 —
図3-2 主要類型の分布（1955年）
図3-3 主要類型の分布（1975年）
図3-4 主要図の分布（2000年）
以上の如く、市町村単位の地域社会類型の立ち現われ方は、すでに見た都道府県の場合とは大きく異なっている。

そこで、いま各都道府県と当該都道府県内の市町村がとる地域社会類型が一致するか否かをまとめたのが、表3-28である。

ここから、1955年段階、44都道府県中37県が県類型と同一の市町村類型が過半数を占める県（一致率50%以上）となっていたことがわかる。しかし、それ以後そうした都道府県は着実に減少し1980年には皆無となった。逆に、県類型と同一の市町村類型が少ない県はそれも反対の動きを示し、一致率が25%に満たない県は1980年に35県に達した。

その後、一致率が25%に満たない県が減少傾向を示し、市町村類型と都道府県類型の一致率はやや高まるものの、2000年現在に至っても県類型と同一の市町村類型が過半数を占める県は3県しかない。

このことは、いいかえれば、現段階においては、市町村の特質を単純に積み重ねただけでは、都道府県の特質を理解することができなくなっていることを意味している。逆にいえば、この点が今日の地域社会のマクロな全体構造の一つの大きな特徴になっているといえる。

ところで、かかる事態は、都道府県の性格が当該市町村間の不均等発展の結果、とりわけ産業変動にともなう人口移動を介して人口集中傾向を強める一部市町村のあり方に大きく左右されることによって生じているものとして、基本的に把握できる。たとえば、1955年段階1市に県内人口の4分の1以上が集中する県は47都道府県中8県しかなかった。しかし、高度経済成長以降の産業変動と人口移動にともなってそうした県が着実に増加し、2000年には26都道府県（札幌、仙台、秋田、東京特別区、横浜、富山、金沢、福井、名古屋、京都、大阪、神戸、奈良、和歌山、岡山、広島、徳島、高松、松山、高知、福岡、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島）に達している（表3-29）。ちなみに、都道府県内人口が集中している市はすべてが県庁所在地にあたっている。

それゆえ、こうした県庁所在地への人口集中傾向の進展をもたらす都道府県内での市町村の地域的不均等発展の深化が、県類型と市町村類型の乖離を大きくさせ、地域社会類型の立ち現われ方の相違をもたらしているとみなされる。こうして、市町村レベルでの地域社会類型のあり方から見た場合、現段階における地域社会の不均等発展は、①各都道府県内における市町村間の不均等発展をともないながら、②全国的な市町村間での不均等発展が深化するという重層的な形で存在していることが明らかとなるのである。

---

注1. 県類型の設定に関しても、市町村類型と基本的に同一の水準を用いているが、生産力と産業構造をより厳密に把握するため、市町村類型の設定に用いた指標と多少異なるものを採用している。本文第1章参照。

注2. 県類型には市町村類型には存在しない類型があるが、その場合には産業構造が同一のものに一致した類型とみなした。

資料 『県民所得統計年報』、『国勢調査報告』、『個人所得推移』より作成。
<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>仙台市</td>
<td>阪市市(26.4)</td>
<td>仙台市(29.7)</td>
<td>仙台市(32.9)</td>
<td>仙台市(36.5)</td>
<td>仙台市(38.0)</td>
<td>仙台市(39.4)</td>
<td>仙台市(40.8)</td>
<td>仙台市(41.7)</td>
<td>仙台市(42.6)</td>
<td>仙台市(32.1)</td>
</tr>
<tr>
<td>特別区部</td>
<td>特別区部(86.7)</td>
<td>特別区部(85.8)</td>
<td>特別区部(80.0)</td>
<td>特別区部(74.1)</td>
<td>特別区部(70.6)</td>
<td>特別区部(68.9)</td>
<td>特別区部(67.4)</td>
<td>特別区部(67.4)</td>
<td>特別区部(40.4)</td>
<td>特別区部(40.4)</td>
</tr>
<tr>
<td>横浜市</td>
<td>横浜市(39.2)</td>
<td>横浜市(40.0)</td>
<td>横浜市(40.4)</td>
<td>横浜市(41.6)</td>
<td>横浜市(40.1)</td>
<td>横浜市(40.3)</td>
<td>横浜市(40.1)</td>
<td>横浜市(40.1)</td>
<td>横浜市(39.2)</td>
<td>横浜市(39.2)</td>
</tr>
<tr>
<td>東京市</td>
<td>東京市(31.0)</td>
<td>東京市(32.2)</td>
<td>東京市(34.3)</td>
<td>東京市(36.1)</td>
<td>東京市(36.5)</td>
<td>東京市(37.3)</td>
<td>東京市(37.4)</td>
<td>東京市(37.4)</td>
<td>東京市(38.0)</td>
<td>東京市(38.5)</td>
</tr>
<tr>
<td>名古屋市</td>
<td>名古屋市(37.7)</td>
<td>名古屋市(40.3)</td>
<td>名古屋市(40.3)</td>
<td>名古屋市(35.1)</td>
<td>名古屋市(36.6)</td>
<td>名古屋市(33.6)</td>
<td>名古屋市(32.8)</td>
<td>名古屋市(32.8)</td>
<td>名古屋市(31.3)</td>
<td>名古屋市(30.8)</td>
</tr>
<tr>
<td>京都府</td>
<td>京都府(56.3)</td>
<td>京都府(64.9)</td>
<td>京都府(64.9)</td>
<td>京都府(60.3)</td>
<td>京都府(58.3)</td>
<td>京都府(57.2)</td>
<td>京都府(56.1)</td>
<td>京都府(55.7)</td>
<td>京都府(55.5)</td>
<td>京都府(55.5)</td>
</tr>
<tr>
<td>大阪府</td>
<td>大阪府(55.1)</td>
<td>大阪府(57.4)</td>
<td>大阪府(54.7)</td>
<td>大阪府(39.1)</td>
<td>大阪府(33.6)</td>
<td>大阪府(31.3)</td>
<td>大阪府(30.4)</td>
<td>大阪府(30.6)</td>
<td>大阪府(29.8)</td>
<td>大阪府(29.5)</td>
</tr>
<tr>
<td>神戸市</td>
<td>神戸市(27.2)</td>
<td>神戸市(28.5)</td>
<td>神戸市(28.2)</td>
<td>神戸市(27.3)</td>
<td>神戸市(26.6)</td>
<td>神戸市(26.7)</td>
<td>神戸市(27.3)</td>
<td>神戸市(26.4)</td>
<td>神戸市(26.9)</td>
<td>神戸市(26.9)</td>
</tr>
<tr>
<td>和歌山市</td>
<td>和歌山市(26.3)</td>
<td>和歌山市(28.5)</td>
<td>和歌山市(32.0)</td>
<td>和歌山市(35.0)</td>
<td>和歌山市(36.4)</td>
<td>和歌山市(36.9)</td>
<td>和歌山市(36.9)</td>
<td>和歌山市(36.9)</td>
<td>和歌山市(36.9)</td>
<td>和歌山市(36.9)</td>
</tr>
<tr>
<td>岡山市</td>
<td>岡山市(25.4)</td>
<td>岡山市(27.0)</td>
<td>岡山市(28.3)</td>
<td>岡山市(29.2)</td>
<td>岡山市(29.9)</td>
<td>岡山市(30.8)</td>
<td>岡山市(31.6)</td>
<td>岡山市(32.1)</td>
<td>岡山市(32.1)</td>
<td>岡山市(32.1)</td>
</tr>
<tr>
<td>大分市</td>
<td>大分市(26.6)</td>
<td>大分市(30.2)</td>
<td>大分市(32.5)</td>
<td>大分市(34.7)</td>
<td>大分市(36.0)</td>
<td>大分市(30.9)</td>
<td>大分市(30.9)</td>
<td>大分市(30.9)</td>
<td>大分市(30.9)</td>
<td>大分市(30.9)</td>
</tr>
<tr>
<td>高松市</td>
<td>高松市(26.5)</td>
<td>高松市(28.6)</td>
<td>高松市(28.2)</td>
<td>高松市(31.1)</td>
<td>高松市(31.7)</td>
<td>高松市(32.0)</td>
<td>高松市(32.2)</td>
<td>高松市(32.2)</td>
<td>高松市(32.2)</td>
<td>高松市(32.2)</td>
</tr>
<tr>
<td>北九州市</td>
<td>北九州市(26.3)</td>
<td>北九州市(26.3)</td>
<td>北九州市(26.3)</td>
<td>北九州市(26.3)</td>
<td>北九州市(26.3)</td>
<td>北九州市(26.3)</td>
<td>北九州市(26.3)</td>
<td>北九州市(26.3)</td>
<td>北九州市(26.3)</td>
<td>北九州市(26.3)</td>
</tr>
<tr>
<td>熊本県</td>
<td>熊本県(25.1)</td>
<td>熊本県(25.1)</td>
<td>熊本県(25.1)</td>
<td>熊本県(25.1)</td>
<td>熊本県(25.1)</td>
<td>熊本県(25.1)</td>
<td>熊本県(25.1)</td>
<td>熊本県(25.1)</td>
<td>熊本県(25.1)</td>
<td>熊本県(25.1)</td>
</tr>
<tr>
<td>鹿児島市</td>
<td>鹿児島市(26.5)</td>
<td>鹿児島市(28.3)</td>
<td>鹿児島市(29.2)</td>
<td>鹿児島市(29.2)</td>
<td>鹿児島市(29.2)</td>
<td>鹿児島市(29.2)</td>
<td>鹿児島市(29.2)</td>
<td>鹿児島市(29.2)</td>
<td>鹿児島市(29.2)</td>
<td>鹿児島市(29.2)</td>
</tr>
<tr>
<td>那覇市</td>
<td>那覇市(29.2)</td>
<td>那覇市(28.2)</td>
<td>那覇市(28.3)</td>
<td>那覇市(26.7)</td>
<td>那覇市(25.8)</td>
<td>那覇市(25.8)</td>
<td>那覇市(25.8)</td>
<td>那覇市(25.8)</td>
<td>那覇市(25.8)</td>
<td>那覇市(25.8)</td>
</tr>
</tbody>
</table>